

東西合併統一記念興行

六月興行

文樂



塵



浄

火

形



瑠

璃



四ッばつ



文樂座



東西松竹

合併統一記念興行

赫耀たる太陽の六月、みなさまの御健康の益々御熾んなことをお喜び申上ますこの六月こそはわが東西松竹が合併の實を挙げ爰に愈々全日本の演劇興行の統一を達成した次第であります、この隆盛を觀るも偏にみなさまの厚き御支持の養でございませ謹んで御禮申上ます。愈々其名の顯著に在るわが文樂座人形淨瑠璃の六月興行を東西松竹合併統一記念興行チエーンの一として人形淨瑠璃の精粹を蒐めて、皆様の御期待に副ふごころ何卒よ以上の御支持御聲援の程お希申上ます

昭和六年五月

四ツ橋

文樂座

昭和六年五月卅一日初日

初日 午後二時開幕
二日目より 午後三時開幕

二日目よりの

・御觀覽料・

- 一等椅子席 御一名—金三圓
- 二等席 御一名—金一圓五十錢
- 三等席 御一名—金八十錢
- 一等お座席 御一名—金三圓五十錢

一等お座席 是五日前より
二等椅子席

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一一番
專用電話 七四〇八番
電話南 三七八八番

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

すま希へ部輯編座樂文は向の望希載掲御告廣トツカへ誌本

刷印るゆらあ 所刷印堂英日井永

目丁一通堀佐土區西市阪大
番三〇三長
番〇四九四
番一四九四 } (44) 堀佐土

美樂酒 大天行新津大天

新加坡美利山善治酒廠

此酒之味 醇厚而甘 入口則覺 精神百倍 誠為補品 中之極品 凡欲強身 壯體者 宜早服之 功效如神 誠不可不 備也

此酒之味 醇厚而甘 入口則覺 精神百倍 誠為補品 中之極品 凡欲強身 壯體者 宜早服之 功效如神 誠不可不 備也

此酒之味 醇厚而甘 入口則覺 精神百倍 誠為補品 中之極品 凡欲強身 壯體者 宜早服之 功效如神 誠不可不 備也

此酒之味 醇厚而甘 入口則覺 精神百倍 誠為補品 中之極品 凡欲強身 壯體者 宜早服之 功效如神 誠不可不 備也

此酒之味 醇厚而甘 入口則覺 精神百倍 誠為補品 中之極品 凡欲強身 壯體者 宜早服之 功效如神 誠不可不 備也

此酒之味 醇厚而甘 入口則覺 精神百倍 誠為補品 中之極品 凡欲強身 壯體者 宜早服之 功效如神 誠不可不 備也

此酒之味 醇厚而甘 入口則覺 精神百倍 誠為補品 中之極品 凡欲強身 壯體者 宜早服之 功效如神 誠不可不 備也

此酒之味 醇厚而甘 入口則覺 精神百倍 誠為補品 中之極品 凡欲強身 壯體者 宜早服之 功效如神 誠不可不 備也

此酒之味 醇厚而甘 入口則覺 精神百倍 誠為補品 中之極品 凡欲強身 壯體者 宜早服之 功效如神 誠不可不 備也

此酒之味 醇厚而甘 入口則覺 精神百倍 誠為補品 中之極品 凡欲強身 壯體者 宜早服之 功效如神 誠不可不 備也

此酒之味 醇厚而甘 入口則覺 精神百倍 誠為補品 中之極品 凡欲強身 壯體者 宜早服之 功效如神 誠不可不 備也

此酒之味 醇厚而甘 入口則覺 精神百倍 誠為補品 中之極品 凡欲強身 壯體者 宜早服之 功效如神 誠不可不 備也

此酒之味 醇厚而甘 入口則覺 精神百倍 誠為補品 中之極品 凡欲強身 壯體者 宜早服之 功效如神 誠不可不 備也

此酒之味 醇厚而甘 入口則覺 精神百倍 誠為補品 中之極品 凡欲強身 壯體者 宜早服之 功效如神 誠不可不 備也

三味線

此酒之味 醇厚而甘 入口則覺 精神百倍 誠為補品 中之極品 凡欲強身 壯體者 宜早服之 功效如神 誠不可不 備也

美天行新津大天

東 西 松 竹 合 併 統 一 記 念 興 行

(左記時間は豫定につき日に依り
多少の遅速は御諒承願上候)

二日目の豫定時間表

前 加賀見山舊錦繪

草履打の段

草履打の段より
奥庭の段まで

(午後三時より三時三十五分まで)

御休憩時間

十分

廊下ののの
長局ののの
奥庭ののの

段 (三時四十五分より四時十五分まで)
段 (四時十五分より五時二十五分まで)
段 (五時三十分より五時五十分まで)

御食事時間

二十分間

中 紙子仕立兩面鑑

大文字屋の段

(六時十分より七時三十分まで)

御食事時間

二十分間

次 御所櫻堀川夜討

辨慶上使の段

(七時五十分より九時五分まで)

御休憩時間

十五分間

切 義士銘々傳

赤垣源藏出立の段

(九時二十分より十時十五分まで)

(舞臺意匠)

松田種次

六・月・興・行・

文樂座人形淨瑠璃





三都の淨瑠璃

淨雲、播磨、加賀

日夜の念願を達して、さうく一人前の太夫となり、道頓堀へ現れた。理太夫は、その藝が非凡であつたばかりでなく、頭の發達した男だつた。さ見れて、瞬く間に師匠や大師匠の所謂井上流淨瑠璃なるもの、蘊奥をすつかり呑み込んでしまつた。それと同時に、なんだかまだこの上にも擴い藝の天地があるやうな氣がしてならなかつた。もさく負けじ魂を向上心に燃え上つてゐる若い理太夫

こんなことではとても我慢が出来なかつた。何處までも奥の奥まで究めてかゝらねば承知が出来ないさ。氣を出して来たのである、彼は一旦道頓堀の地を離れやうと決心して師匠の許可を得て、一座を引連れて京都へ出向ひた。さいふのは京都には紐州の和歌山から乗出して、京都の淨瑠璃として深い根城を据えてゐる宇治嘉太夫（後に加賀掾）の一座がある、それ等の他流と對抗して見たいからでもあつた。天和初年、四條河原の小屋で『日本三代記』や『松浦五郎』などの井上流淨瑠璃を上演した理太夫は、その意氣込みの熾んであつたのにも似ず、みごま失敗に失敗を重ねてさんくの体だつた。暫らく休場をつつけてゐた理太夫は驟

然として一座を解散し、飄然敵方であるべき筈の宇治嘉太夫の一座に投じた。いふまでもなく井上流の深奥を極めて懾らすしてゐた理太夫は更に宇治流の秘奥を探ぐらんとするの精神からであつた。井上流さといひ、宇治流さといひ、この京阪の二大家が、いつたいどういふところから流れて來てゐるかといふさ、その源に薩摩淨雲さといふへんな大物がある。理太夫の今後の功績を語る上に於て、是非共知らねばならぬ淨瑠璃の源流であるのだからこの淨雲を始め二大分流である、井上播摩と宇治加賀の狀態をくわしく説いて置くことにする。元來創始時代の淨瑠璃さといふものは混沌散漫として、殆んど捉らへざころのないや

うな、形式のものであつたのを、兎も角も『操り淨瑠璃芝居』としての形を備へるまでに漕ぎつけたのが淨雲を始め播摩加賀の功績であつて、寛永年間から寛文に亘つて、この大事業が爲し遂げられたのである。

先づ順序として薩摩淨雲から始める泉州堺の人で祖父の淨兄は水無瀬流の琵琶の達人、その子の淨慶は薩摩掾を受領して西の宮の傀儡師を語りつて人形を操らせ、豊太閤に御覽に入れた名譽の人、淨雲は即ちこの淨慶の子で、生れは文祿四年、通稱が源太郎直嗣、藝名が虎屋治郎右衛門又は小平太、はじめ澤住檢校の門に入つて薩摩太夫と名乗り後年剃髪して淨雲と改めた。戦國時代の氣風を享けて非常に剛健な性格の人で、

うも京阪のやうな柔らかな氣風が氣に入らなかつたものと見えて、寛永の初年江戸に下つた。

江戸へ來た淨雲は中橋廣小路に芝居を立て人形操り淨瑠璃を興行しはじめた。この時までかうした興行物には一定の小屋といふものが無かつたのを此時始めてさうした常設興行場といふものゝ出來たのである。この興行中たま／＼薩摩の島津侯の目に止まり、屢々その館に召されて御覽に入れることになつたが、島津侯は淨雲の藝を非常に感嘆されて、京の人形師に命じて、これまで使つてゐた土人形を止めて之れを使へと悉く木の人形を取り替へられた。通り四丁目に住む鶴屋某といふのがその人形の御用を承つたのだが、これが木

の人形の始まりださある。なほ又此座で使用する紙幕が美しい絹の幕に取り替へられたのも島津侯の賜物である。それは或日『夜討曾我紋盡しの段』を語つてゐる時、島津侯の見物があつた。十文字は島津の紋といふ所を早速の機智で『丸に十文字の御家の御紋』と語り替へたので非常に御意に適つて、すぐ館に掛けられたものであるのを外して下げ渡されたといふことになつてゐる。かういつた調子で從來まで簡單素朴であつたころの人形淨瑠璃が次第に華美になつて來て、鼠木戸の上に拜領の絹の幕が張られるやら、だいぶ豪華の風に傾いて來た。

そんな譯で寛文十二年俄然興行禁止を命ぜられるやうなことになる淨雲

は獄に投^なげられたむ、これは間もな
く免^{ゆる}された。而し淨雲の江戸出現は
如何に當時の人心を驚^{おど}かしたか、江
戸風の人情に適^{かな}つた豪快な淨雲の語
りぶり、當時の作者北條宮内の書
いた『長生殿』高館『八島』大職冠
』に淨雲が自ら節附をしてゐる點に
於ても、思ひ半ばに過ぎるものがあ
る。又淨雲も自ら淨瑠璃の作を
したといふことであるが、これは今
に傳^{つた}はつてゐるものがない、創始時
代に短篇物に嫌^{あきら}らず段物の六段續き
を語つたのも淨雲が始まりである。
さて此淨雲門下の四天王に、虎屋丹
後^{このぢ}、同長門^{どうちやうもん}、同源大夫^{どうげんたいふ}がある。
丹後と長門は師匠の衣鉢を傳へた人
丹後はその性質が豪氣で遊越な感情
をもつてゐた人で、後に市川家の荒

事の素因を爲す金平淨瑠璃を創始し
た謂は、武勳派の奇傑である。さう
してもう一人の源太夫は、丹後とば
全く相反して優艶閑雅とも云はうか
ごうも荒つばい江戸の空氣には合は
ない人だつた。本人はむろんそれを
自覺して京都へ移るこゝになり、同
門の宮内喜太夫など、結んで、次第
にこの優美な王城の地の氣風に合ふ
やうな淨瑠璃を語つて、だん／＼深
い根を植^うえつけた。
この源太夫の門人が即ち井上播磨で
宮内の門人が宇治加賀である。
井上播磨は寛永九年、京都上立賣に
生れて、通稱を市郎兵衛と云ひ大内
の御簾を調進する工みの家であつた
謡曲に堪能であつたが、やがて源太
夫の門に入り、つぶさに研鑽の功を

積んだ。やがて一家を爲すに及んで
彼れは周圍をふり返つて見た。京に
は師匠の源太夫を始め、山本土佐^{やまのちのすけ}、
伊勢島宮内、虎屋上總^{とらやのちやうそう}、
勢力を占め、さても播磨が新らしく
進出する餘地もない、そこで今は無
人の境さといふべき大阪の地に目を
つけ斷然京都をあこにして大阪へ下
つて來た。さうして將來の礎地を爲
す可き淨瑠璃の根を下ろした。
播磨はごういふ淨瑠璃を語つたかこ
いふと百餘番の新作物のうち、多く
は道行、景事に屬するもので、操り
年代記にはその得意中の得意物とし
て『頼義北國落』の掛物揃、『菅原
親玉』の歌仙、『源氏筑紫合戦』の宮
島八景、『頼光跡目論』の搦ま。馬
の段、又は屏風八景、『五天竺』を數

へてあるが、いふまでもなく作は拙劣で没趣味なものであるが、一度び播磨の口から傳へられると、その『うれひ』『修羅』の情が剛柔程よく調和して人の心を捉へたものに違ひない。播磨は或時門前を通る江戸萬歳の音調を聞いて自ら大いに發明をした。それは音調に情を寫す、即ち情に應じて自由に節調を使ひ分けるさいふ一風を創造したそれが今日傳はるころの所謂『ハリマ』地である。なほ播磨は音律の理論に就ては平生深く考へるころがあつたものと見え清水理兵衛に示した教訓に、相當含蓄に富んだことを云つてゐる。

らざれば人の心に徹へ難し、云々播磨が名聲は日に月に高くなつて故郷京都からも再三出演を懇めて來たそこで、さりあへず貞享初年久々京の土を踏むことになつた。四條の芝居で『頼光跡目論』を語つて稀有の好評を博したが、惜しいことには同年五月、急病を發して五十四才を一期として此世を去つた。大阪淨瑠璃の開發者として大恩人たることはいふまでもない。

もの即ちそれである。かういふ風に土地の氣風に合ふ創作が出來て來た以上、當然江戸派なるものは影をひそめて加賀の一人舞臺になつた。かうして京都の第一人者となつた加賀はその七十七年の全生涯に、かなり夥しい功績をのこしてゐるが、さりわけ文才があつて『いろは物語』とか松の落葉にある『四條河原京八景』の端淨瑠璃など今に聞こえたもので、近松門左衛門と交はつては『當流小栗判官』主馬判官盛久、『弘徽殿妬嫉打』徒然草、『團扇曾我』後に『百日曾我』などを、又井原松壽軒には『曆』、『凱陣八島』(或は近松さも云ふ)の作物を得てゐて、その地文藝の人々を交通して廣く淨瑠璃節の爲に新作を求めた所謂新人肌

であつたらしい。

以上によつて清水理太夫が、淨瑠璃道の爲めに、自己一流の藝風を編み出さんご企て、宇治加賀の門に入つた心のほどが窺はれるわけである。宇治流の研究に頭をひそめる一方、流行唄、俗謡、小唄、祭文、説經節萬歳その他音曲と名のつくものには大道藝人の謠ひ物から、物賣りの呼び聲にまで、微細な注意を拂つて、自らの淨瑠璃を發明することに没頭した。彼は明けても暮れても、たゞ一意その工夫に身心を疲らしたのである。けれども理太夫の思ふ壺にはなかく嵌つて來ない。苦悶焦慮の月日はすん／＼と過ぎて行くその頃嘉太夫の芝居に『西行物語』が上場され理太夫はその二日目、藤澤入道

夜盜の段を勤めた。豫て井上流で鍛へた得意の修羅語り加ふるに無比の豪音、生温い京童べごもを吹き飛ばすの概もあり、見物は勿論師匠の嘉太夫も舌を捲いて驚いてしまつた。後世恐る可しと、ひそかに嘉太夫をして嘆聲を漏らさしめたといふ。而し理太夫にまつては、かうした當座の人氣や好評ぐらひは嬉しくもなんともなかつた。彼には相變らず新派創見の煩悶があるばかりである。ある夜、理太夫は突如として、嘉太夫座を脱出して行方を晦ました。數日にして、理太夫の姿は西國路へ急ぐ旅人の中から發見した。理太夫には道件があつた。それは興行師の竹屋庄兵衛と三味線弾きの尾崎權右衛門とである。

やがては一派を編み出す理太夫の道件になるほどの者、興行師といひ、三味線弾きとは云ひながら、もよもよ尋常人ではない。他日義太夫旗上げの際、ともに生死をかけて、その成功を救けた左右の腕である。この三人が旅かけて、ごういふことを語り合つたか、想像するに難くはなかり太夫が熱烈火の如き所信を二人の胸に強く強く焦きつけたに相違ない三人は程なく宮島の市を當てに、安藝の嚴島に着いた。かうして此地に腰を据えて暫らく興行を續けることにした。芝居は幸ひに好人氣だつたので、假の根據地したのであつた。而し理太夫の目的は決してかういふ興行の上にあるのではなくて、暫らく都會の空氣から免れて將來の飛躍

を劃策し、一方靜かに冥想して、新淨瑠璃の發見をハツキリと自分の頭の中から擲み出したのであつた。而しなかくそれは容易ではない。理太夫は此の上は神の力に頼るよりほかはないと考へた。

芝居が終れるのをまつて、ひそかに小屋を脱げ出し、嚴島神社の方へさ急いだ。春の夜は朧に霞をこめて、さなきだに壯嚴なお社を一層神秘の色を湛へて見せてゐる。彼は社殿の淡い燈籠の灯影をたよりに、長い廻廊を幾曲りして正殿の前、ひたすらに祈願をこめた拜禮を終へた彼はなほ、こゝを立ち去らず、いつまでもくちつと座つて何やら冥想に耽つてゐる。大氣は澄み渡つて人の氣は全くない。遙か海上に聳え立つ大華

表の脱を洗ふ潮の光り、床下に満ちくる波の音楽、冥想には打つてつけない舞臺である。かうして理太夫は毎夜々々こゝへ通つて來て一流開發に専念した。時には夜を徹したことも屢々であつた。

日本三十六佳選といふ青表紙は、この時の容子を非常に誇張して、風もないのに一時に潮が湧き上り、海上一面に漣り立つて、翼を張る左右の廻廊が浮み上るを見る程に、音楽が空に聞え、花を降らすと共に、元冠を戴き、眞紅の衣を着けた童子が現れて、理太夫に一軸の巻物を授けたと記されてゐるが、さう都合よく行けば世話はない。而しかうした境地にあつて専念した理太夫の純眞な心には如何なる神をも動かさずには措

かなかつたこと、思はれる。理太夫がかうまで肉をそぎ骨をけづる思ひをして一派を編み出さんとする。その目的の淨瑠璃さはいつたいどんなものかといふと、すでに曩に述べたやうに、師匠の井上流の長所が加賀流の長所を一丸にして、そこに曲節の調和を謀り、更に自己の獨創を其上に盛り上げやうとするものなのである。

嚴島參籠の賜物は遂に理太夫に或る暗示を得さしめた。

木谷蓬吟著
文樂今昔譚より



前
加賀見山舊錦繪

草履打の段

草履打の段より
奥庭の段まで

腰 腰 善 尾 岩
元 元 六 上 藤
鶴 鶴 野 竹 竹 豊 豊 竹
澤 澤 澤 本 本 本 本 本
友 友 勝 陸 長 辰 島 文
造 助 平 太 太 太 太 太
大 吉 吉 桐 竹
田 田 竹
光 榮 政
之 榮 政
助 三 龜

人形

この淨瑠璃は天明二年江戸外記座に上演されたのが最初でこれは享保九年松平周防守の邸に起つた事實上よつたものでこれに加賀騒動の世界を借りて来て脚色されたものであります。淨瑠璃となつた内容を申上げますと、入間家の家老蟹江一角は局岩藤及びその弟浮島主殿等と心を合せてお家横領を企てるにつき邪魔になる中老尾上、谷崎主水等の忠臣の自滅を計ります。息女大姫は許嫁義高の菩提を弔ふため落飾して七條の袈裟を賜るその義高がかたみ朝日

の彌陀の尊像の守護を仰せつけられたのは中老尾上であつたが町人の出なれば武藝の心得なく奥勤めなり兼ねるま届、岩藤はさん／＼に罵り恥しめました。尾上の召使お初は主人の大事さ身分を忘れて其處に出て岩藤と立會つて之を參らせませす。岩藤は尾上を罪に落さん朝日の尊像を奪ひその上劍澤彈正と示し合せて尾上の預かる蘭奢待の名香を草履の片足さすり替へ置き尾上をさん／＼に草履で打擲します。すこ／＼ま部屋に歸つた尾上は口惜さのあまり、一切を書置して自害して果てます。主人思ひのお初は怪しい鳥啼きに胸騒ぎして歸つて見ればその始末に怨み草履を持つて直に仕返しに岩藤の部屋へま奥庭に廻れば其處に岩藤は

姫君調伏の菊人形の企みをしてゐましたのでお初は岩藤の頭へ草履をのせて恨みの數々述べ遂に又を合せて之を殺害し朝日の尊像を取り戻しました。既に岩藤の一味の悪事が現れお初の忠節は上聞に達して二代目尾上ミ中老に取立てられるのです。これの床本を寫しますぞ。

(床本) 草履打の段

勇ましき、かしこき神の、神諒、折から告ぐることもまわり、いざ御立さ夕ばえ、の中老尾上先に立ち、多くの女中が取りかこみ、對のほうしも一様に、むれ入るサギの如くにてかへりもうしの鳥居前、イザお局さま御いつしよま、云へど岩藤不精不精、立ちかへらんさするまころへ

きかゝるわしの善六が兩手を土に、イヤもうしお局様、最前より申あげようぞ存じましたれど、あの事にまりまされまして、ハツタリも失念にりました。エ、他の儀でもございませぬがこの間仰せつけられました、金の儀で、へい／＼／＼おうけ取り下さいませま、半分云はせず、コレ／＼善六、この岩藤は局役、むさくるしいもの取りあつこう役じやない。その金は召使のサヤに手渡しシヤ、と言葉數、云はぬ色なる山吹の包ざり出し、ヤモウ、神佛よりトウトクおもふこの金をむさくるしいもの等と御手にふれられぬと云ふはア、またかくべつな御屋々様、うなるほご金もつても、町人さ云ふものは、イヤシイものでござりますぞ、

云ひつゝ、金をふまころへお屋敷さして急ぎゆく。あざ打見やり局岩藤、何と尾上どの、町人に、めづらしいあの善六、町人はいやしいものぞモかんしんした、いまの云ひ様、ヤ、コリヤほんにこなさまへはさしあひであつたもの、ホホホオホ、オウわしとした事が、つく／＼／＼さ氣の毒なホホホ、イヤ、なに尾上殿へ、こなさまの宿さいふは金持なれど町人假親しての御奉公、スリヤ今わしがいふた事、氣に障りやませぬかさ味なまころへしかける意地さおもへどわざとソラサマ顔、これは又岩藤様の痛み入ります御あいさつ、何の私ささようなこそおつしやるさほり、親共お御出入の縁をもちましてかようなおもひ御奉公も、ありがた

い身のしあわせ、根が町人の私をこ
 さ、さぞやふつゝかな事計りでござ
 いましよこの上まで岩藤様はばか
 り乍ら、よい様にお指圖たのみあげ
 ますと柳ながしのしなやかに、いひ
 まわしたるリハッさよ、お、何じや
 え、町人の娘御故、いたらぬこを
 指圖してくれいかえ、ホンニつべこ
 べくさうまい口ヒラじやのう、何
 のお前の御はつめでわたしが、さ
 しづ受けそな事かいの、うついで
 じやよつていひますが、こなさまの
 親御さいふはお屋敷の御藏御用をつ
 さめやるさいふ、その用達顔の高慢
 お鼻の先へぶらついてコレ、この顔
 の見えるワイのみえるわいの、イヤ
 また上のこさいふじやないが、金の
 イコウはきついものじやこの後さて

もその金もち顔やめにして下され、
 イヤく、お役向は御中老この岩藤
 は周役。お、お周役、おおもてな
 らば御用人格じやぞや、女一通りは
 勿論萬一狼藉もの又盗賊なごがしの
 び入り、サ、その時は役柄じや、女
 乍らも、御前のおため、討さめる器
 量がなけりやつさまらぬ、御奉公、
 シヤが、定めて長刀の一手も心得が
 ござらうの、お、ソリヤあの誰にけ
 い古なさつたぞイヤ、あの、その御
 師匠様は何さいひますエ、コレく
 尾上殿くくエーマアこな人ワイ
 ノ、人にばつかりものいはせこなた
 は耳でもつぶれたかさ、かみつけれ
 れて尾上はた赤らむ顔をおしくく
 し、おはづかしい事乍ら、その心掛
 はないさいふのか、あの心掛はない

ない、オホ、い、オウ、みな
 もの、あ、あれキヤ、キキヤ、お
 もひ役をつさめながら心掛はない
 いの、あの心掛はないさいふの、オホ
 い、イヤ、おおれ、そりや、あ
 の何じやぞえ、お、ほんに、これが
 ぬすびごじや、お、知行ぬす人じや
 祿ぬす人じやく、何さそうでは
 あるまいか、さまくしかけたる雑言
 を尾上は耐へくても無念の涙たも
 ち兼、齒をくひしぱりこらえ入る、
 お、何じや、なかしやるか、お、口
 惜しやる、町人の娘でも、今では武
 家の御奉公人、お、くやしがる、お
 んごうりじやく、お、あれみや、
 お、あれみや、かなしそな、顔ア
 イノおほ、ホ、い、オホ、アハ
 アハ、アハ、アハ、オホ、い、

イヤ、最前もおつしやるには心づかぬ事あらば、御指南たのむさいはしやんすたの、ム、どれ、おしえてやるさ立ちあがり、もつたる扇ふりあぐれば、身をかわして打おさす、手向ひなさば一さうちさふさころ刀ぬきはなせばこれはさおごろく女中連尾上も今はたまり兼ね、共にゆかんぞ立寄りしむ、おもひ廻せば廻す程、大恩うけし、御主人の御先途も見届けず我が身に誤ちあるならば、後にのこりし親達のおなげきは如何ばかりさ、懲へるつらさ悲しさは胸もはりさく血の涙、身もさくばかりなげきしはそばで見るともあわれなり。ムウ、相手にならぬは岩藤さこわいのか、但しは、もの三昧がおそろしいか、お、おそろしいのか、道

理じやくそんなら、もうこりやおさめましょワイノ、どれくかへりましよくほんにこなさんにか、つて、お、これみやしやんせ、足袋も草履も砂まぶれになつたワイナ、イヤ何尾上殿、何さこの草履のよこれたのをいふて下さんせぬか、あのわたくしに、あいの、え、イヤかくくじやま申してそれがまあ、何じやそれがまあ、ふいて下されふいて下され、お、病もの、こしぬけにはものよこし、ようより、よいわいなこの草履さ、ぬぐより早くおつまつて、尾上が頭テウくくこれはさばかり奥女中氣の毒あまり立さわぐさ尾上は聲かけ、あ、これくくさわぐまいく女中達、岩藤様がこの尾上を御意見のための御てうちやく、

わしやもうありがさうてく、か、様の御せつかんさおもうてこの身のふしんくまでありがさうてかたじけない、ホ、ホ、ホ、ホ、イヤもうし、岩藤様、生みの親も及ばぬ御意見、エ、ありがさう存じまする、この上はずい分文武藝をも心かけて御奉公を致しませう、また、この御草履は私わために御きようくんのこの一さ品、もうし受けて私の守りさ懐中したる心根はいわぬ色をやいひ草履、胸におさめしりハツサヨさすかの岩藤あきれ顔ナンツヤその草履わしにもろうて守りにかける、あの守りニカ、てもまあ、おそろしいしんぼうな人じやなあ、意見した田婆がある、以後キツトたしなましやれ、サ、い、ゆきませう、くおいさま

廊下の段

竹本 鍛太夫
豊澤 新左衛門

人形

腰	召使	局	伯父
元	お初	岩藤	父彈正
大	吉田	桐竹	吉田
ぜ	文五郎	政龜	玉幸
い			

申そうさかへ、草履は後に尾上をば
 ならみ廻して立歸る。尾上は後を打
 みやり、こらえくしため涙一度に
 ワツト伏しまるび身も浮くばかりに
 なげきしむ數多の女中が立寄つてコ
 レく、もうし尾上様、あのにくて
 いな御局の氣實は、常からよく御存
 知、おばら立は御ごうりなれど、い
 つもの事じやおぼし召しかならず
 御氣にさえられずさまづ屋敷へ
 お歸りませイサメ立つればなくくも
 かいえ引しめ立あがり女心の一筋に
 又おもひ出す口おしなみだ早寺々に
 くれの鐘、あすは我が身も消えてゆ
 く、夕告げ鳥のなくも打つれ家形へ
 急ぎゆく。

(床本) 廊下の段

星月夜、鎌倉山に風誘ふ、扇ヶ谷
 に棟高き、前の管領足利家の思ひ人
 千代の方の御館、咲きつゞきたる花
 の御所、盛りなす見の奥御殿、色香
 争ふ長局、武家さはいへどなまめか
 し、世のうきを空吹く風ぞ有頂天、
 くつたくなしの牌共、一つ所に寄集
 まり、チ、や冬女郎、軒から軒の隣
 部屋も事多い時は遠々しく、今更い
 ふに及べれども、人目には閑に見え
 奉公向のせつろしき、チ、お仲の
 いやるに違ひはない、人一ぱい精出
 しても部屋方者さいやしまれ能い奉
 公もするこさならぬ、皆めんくの
 肩づくじや、此春の交代には、出て
 のけふと思ふたれど、エーいつこも

同じ雞の音色も、重年をしたのじやわいのう、モゴの白壁も同じこま、縁次第じやささむなご口もはしたの森しさ、主の噂も鳥影も日脚ものびる八ツ下り、お下りのお迎へとお初め、それさ氣も浮かぬ小腰かやめてコレハ、皆打寄つてお睦まじい、面白そうなお咄し、新参の私故、其仲間へは、いるまい、後程お目に云捨て、御殿をさして行所を、コレ「お初ごのそなたも、ちが仲間内マア、愛へさ呼かけられ、いやさもいはれず惚くの、中へすればさしでのお仲、ホンニコなたは仕合せ者じや、結構な旦那をされば勤めながら骨は惜まぬ、そなたの御主人尾上様の心よし、何から何迄御發明な御生れ付、道理こそ育てが育て

じや、お宿さいうは此お屋敷の御金御用一式、親御が勤めるげなの、人は氏より育ちじやさ、影口咄しの腰折つて、まけぬお冬がつぼく口、氣にはかきやんな、お仲が御主人お局の岩藤様、この廣い御殿のうち、唯一人お睦まじい相口さいふがれつからない、これお初ごの、昨日鶴ヶ岡のこま聞いてか、イエわたしは何んにも存じませぬ、そんならマア聞きやお局様さ尾上様さ御同道で御代参においでなされた時、例のわんさんが出たかして、あらうこまかはしたない御用先で悪口たら、まだ其上に大それた、お中老もお勤めなされるこなたの御主人尾上様のおぐしを、主の草履でたいたりさのふ勤忍ぶよい尾上様、御代参なりお上の

名代、ちつさこらへて其場は濟んでしまふたげなが、ナント思やる、かけ構ひのないこちさら迄、腹が立つて、タアハ癪が差込んで、お夜食もたべなんださ。色かゆる松風の評判じやさ口々にそしる折から奥の間より走出るは顔も心もすぐならぬ、曲りくねつた局岩藤、あたり見まはし、て、ヤイ、女共やかましい、そりや何をいふ、次へ行け行かぬかエ、立たぬかま呵り付られ婢共が我部屋へ立つて行コリヤ「初我にはちつさ用がある愛へい、ハイハテこはい事はなはいのふ。ハイこいさいはマアおじやいのふハイコレそなたは女子供を集めて一はな立て、何で人の噂をいふぞサアなぜ自らが事を悪ふいやつた

何ぞ意恨でも有つてか但し又尾上殿が悪ふいへと言ひ付けたかサア最つこ愛へおじやサごぶじやサごぶじやいのふご猫なで聲も氣味悪くお初は漸く傍へ寄りイヤ私はたつた今さんじまして何も申す間はござりませぬ何も申は致しませぬお赦しなされて下さいませと行かんとするを小腕取モウ／＼それで知れた／＼奥聞ふより口聞けと悪ふぬかさぬものを何赦す事が有アノ悪根性の尾上顔主が主ならおのれまで悪工を／＼そふなしびご女郎めマ佛性なこのわしをよふも／＼ない事迄捨てなげ言ひやがつた引きがれめごつらを見いナ／＼ホ／＼／＼チ／＼よいつらぢやなアテモマよい器量ぢやなハ／＼アご傍若無人に引寄せてつめつた／＼いつ打擲

におろ／＼涙お初ご思ひ誤りましたさ出でばこそ只伏沈む斗りなり、お使者の御入エイウぬは仕合せ者め只置くやつではなけれ共能時のお使者故ゆるしてくれるエ立てうせいご怒りの立蹴口惜涙を押し隠ししほ／＼として立つて行程も有らせず長廊下のつか／＼ご權柄眼出向ふ岩藤互にそれご表向相口馬の會給ほれ／＼チ／＼お使者ご有しなごなたかご思へば彈正様、御苦勞様やご互の目つかひしたり顔に上座に直り其以來は打絶へ申たお使者の趣餘の儀ならず持氏卿御病氣なりご世上へ披露し御賢息お二方の中惣領たる月若殿は千代の方の出世成れば御家督ごの御内意申入よご後室の御口上かくの通りごのべにけりム／＼すりや御家督は月若様

是迄色々ご心をつくせしは仇事かホイテサテ何の案じる事はない肝心かんもうのコレサ繼目の論旨我等が方に隠し置けば月若の家督相續思ひもよらずシテ兼ての首尾はいかゞでござるサレバ其事大切なアノ密書いづぞや問註所で取落しハツト思ふていろ／＼ご捜しても見へぬ密書尾上めが拾ふたごは鏡にかけてにらんて置いたスリヤ尾上めを其分に濟ましては寢覺心ごさんご濟まぬきのふ鶴ヶ岡へ御代參尾上めを同道よい折からご思ふた故立つ居つにいぢわるウトウ喧嘩仕かけても上手遣ふて相手にならず慮外有ては身の落度ごもなかつ程に／＼煮ても焼いても喰はるゝ様な大体力發な女めではないはいの詮方盡きて人柄くづしわたしがはい

た草履を持つて尾上めをぶつてく
ぶちすへ手向ひさせふと思ふた所マ
ア聞いて下されヤモ恐ろしいやつめ
夫をも辛抱しくさつて手持ぶさたに
其場を仕廻ふた時に尾上めが婢に初
さいふへや又こいつめに手向ひさせ
夫から尾上めに付込まふと思ふて今
も今逆さんぐにいちめかけたがこ
いつも又辛抱がヤいヤ賢いやつめ
手向ひ所か誤つて斗り居おつて是も
又つばへは行かぬ此分ならば中々あ
いつも遠ざける事は成るまい兼てこ
ちらも工みの様子げごつているアノ
尾上め思案をかりたい彈正様ム、ハ
テ扱しぶさい女めなみくくの謀に
乗せらるゝ女ならずハテごむなご
思案の内襖の影に婢のお初様子窺ひ
ためらふこもしらぬ岩藤せゝら笑ひ

おゝマ仰山な彈正様此家を一番にこ
企てるお前やわしガアノ女郎一疋が
何で夫程恐ろしいぞアリヤ堪忍づよ
いの中でも有るまい眞實生れ付いた憶
病者又これからは模様をかへあいつ
を追出す其思案はおあんじなされま
すな爰にござりまするくはいなム
……しからば能きに斗らばれよ、き
やつめ一人ばいまくればチ、後はの
宮アノ妾づらは心よし、大殿は死ん
で仕廻ふ、若殿の小びつちよ殿には
あてがいぶちを喰はせて置けば此一
家中はお前さわしがコレ壁に耳あり
岩のものいふ世の響互の胸はナイヤ
ナニ岩藤殿彈正様、吉左右を相待ち
申すこ浮べる雲の空頼み奥さ部屋こ
へ時宣式禮別れてこそは入にけり。

(床本) 長局の段

跡見送りて襖のかけ、御初はそれ
ご抜き足さし足、あたりを眺め、吐
息つきテモおそろしい、たくみご
おさむりのおそい故、ごうか、こう
かご、おもひ過ごし、またものゝ、
ゆくこごならぬ奥御殿、往て見様ご
は思ふたれご、ごめられよか、し
かられよかご、ごつて歸した襖の
かけ、悪局の岩藤殿ご、あの伯父子
の、だんじよう殿、大それた悪事の
相談、こりや、大切な事じやワイノ
尾上様に申上げ、お上への御忠節、
アイヤくくくししようこも、たづ、
大切な事を、なま中に、これを訴へ
て御主様をさごにおさし、ごの様な
御難儀をのけるたくみの程もくれぬ

長局の段

切 竹本土佐太夫

野澤吉兵衛

人形

中老尾上 吉田榮三
 召使お初 吉田文五郎
 町人 大ぜい

わしが大事の御主と云ふは、尾上様より他にはない、そうじや〜と一筋に、恩義に迫る主おもひ、待つ間もさげし長廊下、しづく御殿を尾上がおおり下り、それを見るよりお〜御きげんやう、今お下り、いつ〜よりもおせいお下り、ごうやら、御顔もちも、すぐれず御心悪うはござりませぬかあのハットした事おけうさいの云ひ、毎日々々、御前づこめ、下りの早い事もありようが多うけりやおせい事もあるはこの上まゝある事、勝手しらぬそなた故案じるは無理ならず、さあさもしや、さ何気なき、言葉にそれと氣も付かず、上へをつくむ、上草履、直す草履もきのふの遺恨、おもひなやみて、一筋に歩む廊下も心には、羊の歩み、

ひまの駒、神ならぬ身のそれぞも知らぬ御初かもの案じいく間も遠き長局部屋の戸明けて内入りも、常にかわりし顔色を、ささられまじこしやくにまぎらし正直は、さつきにから持病の癪がおこつたわいの夕飯も食べたふない、いつもの通りさすつてたも、はいさ、お初おさし寄つて先づお枕を遊ばしませ、お風召すなこかひまきを、かひん〜しくも立廻りお癪のおこるも御道理じやそれにつけても軽いものは、奉公さてもきささんじに、旦那様やら御家來やらお友達見るように、御心やすうなさつて下さりや、病氣もささいませぬ、オウ、言やる通り、上々方の宮仕えはいかふ心氣をつかふもの、そなたの父ごも武士と聞いたむ、世々世なら

どの様な御奉公も仕やる筈を、町人の娘のわしが、つかふと云ふは、さぞや〜心うくもおもやらふが、さかくに人は、時節をまち、花咲く春を待つのがかんじん、もつたないこと、御意あそばすな何、ごとも大旦那の御話に御存知ならん、私親子が受けし御恩は、口にも筆にも盡されませぬ、せめてもの、御恩報じ無調法な私を御そばでござうぞ御奉公の御れもひ申し、此の春から、初奉公の御面倒、ありむさう存じます。その大切な御前様が御病身なを御案じ申しそこで御わづらひ、出ん様にぞ存じまするが、年ばもゆかぬ私口からませた事を云ふ、小しやくものさおしかりもあるうけれど、さかくに人は氣を暗らしものに屈たくさ致

されば、わすらひは出ぬものじやま巧しやな御醫者の申されましたがその御養生にはもの見遊山、あの御前様も、しばぬはお好きでござりませうな、おゝなるほど芝居は好きじやが、そなたも、定めて好きじやあるうのいやもう、好きの段ではござりませぬ、そう申すうち歌舞伎より、あやつり芝居の淨瑠璃が私は面白うございますおゝそんなれば、はなしが合ふわしもきつうじよるりが好き而し、たま〜の宿下りより、他はじよるり本で樂しむばかり、わたしもお屋敷へ上りません、その前はよう見物に参りましたが、あたりじよるりも多い中に、あの忠臣蔵のじよるり程おもしろいのはござりませぬぞえおゝあの師直面のにくさ〜い

やもう〜、お前様の御心に〜、壱谷殿の師直へ斬りかけられしそのころに尤もな事におぼし召しますか但しまた、不了見なごにおぼしめすかサ、何ぞおぼしめします、サレバのおた入りよはあつたれぞ意恨に意恨を重ねる上は御もつこもかばあろうかいの、いえ〜〜はかり乍らそりや、お前様の御ひいき口、えんや殿は大不了見、何故ぞ御意遊ばせ、大切な身を軽々しく短氣にその身をほろばし給ひ、親ごさまの御なげき、イヤ、ほんに私さした事が、粗相な、壱谷殿の親御はないもせぬもの、何ぞおぼしめす家國をほろぼし、奥様はじめ御家内散り〜、たつた一人の不了見が千萬人の身にかけつて御恩を受けたものごものなげ

き程は如何ばかりさぞおぼしめすぞ
 おなさない、オウ、あほらしい
 何のこつちや、ひよう子にのつてお
 前様へ、御意見のやうに、お、おか
 し、ごりやおくすりを見て、こうさ、何
 か言葉に、綾の糸、勝手へコソハ立
 つてゆく、後に尾上は胸せまり、し
 のびの涙ふちもせも、あすはなき名
 を白紙に、硯の海のそこはかさ、な
 きなか文も後やさき、書きなく筆の
 命毛も露さ消えゆくはかなさを、た
 え入るばかりしのびなき、涙さ、も
 に、かきこめ桑の文箱も浦しまが
 明けてくやしき遺恨の草履、文もろ
 さもに文ばこのひも、引しめ、こか
 たえなる、手箱のうちを片見別け、
 数も涙の玉くしげ、こま／＼しくも
 古文庫におもひつめたる浮き涙、つ

くむにあまる小風呂敷、中ゆひしめ
 て玉の緒も今を限りの空結ひに、封
 もしごるにかきくれておもはずワツ
 トなき聲も、それにつみしおもひ
 なり、何心なく勝手にお初は心イキ
 セキさ、せんじあげたる薬なべ片手
 に茶わんたづさえ出でサアお薬さ
 さし出だし見れば包ま文箱にキツト
 目をつけこれはしたり、御心悪いに
 ごこえの御文、御氣がつき様に何ご
 さ、問ひかけられて左にあらぬてい
 イヤ、この文ばか、様へ急にあげれ
 ばならぬ文、この包大儀ながら、つ
 い往てきてたもさものがるに、云ひ
 つけられてもじ／＼と、どうやらす
 まぬ今日のしだら、不精／＼にあの
 参れなら参りませうがアレごろうじ
 ませ空合ひも疊つてくる、勝手がま

しゆうおぼしめしませうが明日の事
 になされませぬか、ても初とした事
 が、如何に心安だてて主のいひつ
 くる宿への使、明日の事にでもせい
 さは、如何の主なればさて、主の云
 ひつけを、そむきやるか、イエ／＼
 何の御意をそむきませうぞ御持
 病の御療もおこり、お顔もちも悪い
 故、イヤシヤクキはもうなほつた
 日のたけぬうち早ようゆきや、ハイ
 はようゆきや、何をうち／＼するぞ
 いの、ゆけさ云はゆかぬか、ハイ
 只今参りますワイの、文箱ざりあげ
 次の間の案じに胸もげりつやら明け
 て出したる生木綿の、さばしよぞべ
 なる紋附の、部屋形もの、一てうら
 帯しなほして一人言、今日に限りこ
 の御使ひ、ゆきさもなうて／＼尾

上様への御身の上を案じられてどうもならぬきのふ鶴岡の喧嘩の様に、御殿一同様の取沙汰を、御存知ないか、わしにまで御かくしなさる御心の程がワシわごうも案じらるゝ、眞實底から大切ににおもふ御主の大事を蟲が知らすま云ふのか、あゝ心もこないゝ、御告げんに違ふても、いたふりしてゆくまいか、イヤゝゝゝゝゝゝ云ふ急な御用やらしれぬ事をそうもなるまい、オウ、こう云ふ時の佛神様、ソウジャゝゝゝちりてぶつ、一心先状の手を合せ、なむかえん音様、なむきし母神様、御宿へ参つて歸りますうち、主人の身の上のみあげます、ざりや、一ぱしり急いでこう小褌りゝしく立からげ、錠口さして出でゝゆく、陸見ゆるまで

見送りにこらえゝし胸の内おもはすワツト伏しゝすみ、消え入るばかりなげきしがようゝゝに顔をあげ、まだきのふ今日のなじみのないこのわしを大切に、大恩うけた、主人じやま、年ばもゆかぬ心から、大事におもふてくれる心さし、コリヤ、かたじけないぞよ、うれしいぞヨ岩藤へ遺恨を察しサツキにもよそ事に、じよりのたこえを引きわしが短気な氣も出やうかま、云ひまわしたる健氣なり、ハツ今別れたが一生の別れさばしらすして、サツヤさつかわもどつてきて、なげかん事の不びんやま、身も浮くばかりせき上げて、前後不覺になげきしが、やゝあつて顔をあげ、父様や母様の此の年月の御不びんぞ、御恩は海も尙淺く山よ

りもふかき御恵み、片時忘れぬ御二人さま、この中の御文にも母様のこまゝ、いこうこの頃はおしなべて引かげのはやり病、一入あんじらるゝ程に、この守りにほぎ寺のやく病よけの御守りじや傍輩衆も多し事悪い病の折見舞、うつらぬ程に大事にかげや、またその上に身用心さ云ふて他にはない食べものに氣をつけて氣鬱せぬ様に折ふしは、酒でも食べて氣を晴らし、わすらわぬやう、第二に御奉公を大切に、また合ひ薬の黒丸子切れた時分さ氣をつけても三年で御年もあく、御禮奉公ばようして下りやるを指おりて待つてゐるさ小さい子どもか何そのやうに、成人の此のわしを大事がつてござるその中へ、あの文を御ろうじたら何

と身も世もあられよぞ、常に氣細な
 母様の、その境ですぐに死なしやん
 しよ、今死ぬるよりこの身より、後
 のなげきをみる様で胸もはりさく悲
 しさは何の因果のむくひにて、親子
 のふんの淡すみに書きおく筆のさか
 さまごさかならずおゆるし遊ばせさ
 正体涙せぐりあげ、身もくるふばか
 りさり亂す、あゝ我乍らみれんなり
 女乍らも武家奉公、草履をもつて面
 をうたれ、何面目に、ながらえて人
 に顔も合はされ様、人ばおもえども
 大切な御前様への忠義をおもひ、今
 までは長らへしがこの書おきに委細
 のわけ、伯父理正の悪事の密書命を
 捨て、上への忠臣、たゞ何事も宿世
 の約束、最期暗れの仕度して、一廻
 の經陀羅尼、唱へんものご一間なる

佛間へさして日も西へ夕日まばゆき
 空色も磨き立てたる練べい造り足利
 家の裏門口、文箱かゝへ出るお初、
 形ふり見ずにいきせきさゆく、向ふ
 より二人連れ、何のアツクサ汚し合
 ひ、くるもお初が心の辻占、ゆき違
 ひさま、かなわぬくももう叶はぬこ
 つかへすがまだしもの事、可愛い事
 をしましたと、きく辻占にお初がハ
 ツト、見やる空には一群の止まりが
 らすの鳴きつれて、最期を告ぐるた
 まよばい、心細さも身にしてみて歩み
 もやらず立ちごまりあく氣にかゝる
 く、辻占の今のはなし、鳥なきの
 この悪さ、あれくけしからぬ胸さ
 わぎは、こりやお宿へはゆかれぬワ
 イの御様子ば、知れるこの文箱封じ
 を切つて見てのげようさ、おもひ切

つて封おし切り、見れば包みし草履
 かたぐ文さりあげておし開き、何
 じやかきおきの事、こりやかなばぬ
 さふさころく、一字もよますいつさ
 んに、御門のうちへさ入合ひの鐘も
 無上を告げてゆくころんづおきつる
 うにんぐち半狂亂のお初が仰天、部
 屋の襖も案内なく一間を見ればコハ
 いかに、血に染つたる尾上がなきが
 ら、だき上げてたゞうろくえい死
 なしたりおそかつた、今一足早くば
 あゝこの御最期はさせませぬこれも
 うし尾上様、尾上様、旦那様さ呼べ
 ぞ答へも涙より他に言ばもなきしす
 む、笛のクサビをおもひのまゝかき
 かつてさざるものを何さ答へがある
 ものぞ、何御前様、御披露、ウウン
 こりやさつきにうかひいきいた岩藤

が密書、これさえあれば御身の明りは立つ、ありがたい、ありがたい、これ、もうし、御無念の魂はまだ家の棟においでなさりようえ、きこえませぬワイのキコエマセヌワイの昨日鶴が岡で岩藤面に草履をもつておうたれなさりしその所沙汰は屋敷一つばい、御家來の私も身におしゆうあるまいか、ヤ、無念にはあるまいかいの、女にこそ生れたれ、私も武士の娘、御鬱憤を暗らし兼うか、ゆうべ一と夜まんじりさもせず今日さても思案ざり、もううちあけてお話しなさるか、今うち明けておはなしかさ、身合わして見ても御かくしなさる、エ、不甲ひないお生れじやこそばで見る目のはゆくてサツキにも淨瑠璃の例を引き御

心を引いて見れば、壺谷判官の短氣なのも無理さはおもはぬ尤じやさおひやつた時のそのうれしき、御心に張りがあればあつばれお手はおるさせぬさよるこびはよるこびしがヒヨット御前様が淨瑠璃の壺谷判官さなされてはさ、わざと御前をおなだめ申しおきを見合せ岩藤を一と刀に刺し通し、御恩を報じたてまつらんさおもふに甲斐もこよひのありさまおかきおきの此の表、おはつは仇岩藤の首引下げて御無念を暗らさせましよう、必ずおまち遊ばせま遺恨の草履手にまりあげて打眺め、無念の涙血をそぎこりかたまりし烈女の一念、義女のその名を末の世に錦さかわる麻の衣、女鏡さ知られけり世も早初夜を告げてゆく御夜詰ぶれ

の首芽えて鐵暗燈の光り芽え長局、胸までおろし手を組んでおもひつめたるその眼色、氣も張り弓の三ヶ月も、入るさのかげのくらまぎれ手水鉢にさしよつて、柄杓もつ手もワナく、さすくひあげたる水一口、うちの草履片手には血潮したる尾上が懐劍片手足の早れたば、庭の干草に鳴きつぐる蛙の聲ものすこしあたり見まわし奥の間へ、奥一文字に、

(床本) 奥庭の段

かけりゆく、忍びいりたる奥御殿折ふし人もさだえたるは天のあたえさ向おく深く、うかひ折柄何心なく岩藤が出合ひ頭を最屈強、待ちも上げたる九寸五分中老尾上召しつ

奥庭の段

岩 藤
お 初
安田庄司
忍 び
腰 元

局 岩 藤
召使お初
忍 び
安田庄司
腰 元

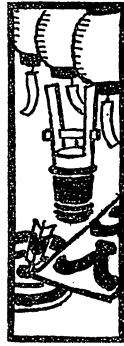
人形

桐竹政龜
吉田文五郎
吉田玉徳
桐竹紋十郎
大 ぞい

竹本相生太夫
豊竹和泉太夫
豊竹島太夫
竹本鏡太夫
豊竹綾太夫
竹本源太夫
豊竹千駒太夫
竹本播磨太夫
野鶴澤友助
鶴澤友平

かひ主人の遺恨、覚えあらんといつかくる、此方もしれもの、身をかわし、ヤア、推擧なるげす女、ひしいでくれんと打かけぬぎすて、お初がき、うでむつす取、組ふせんご金剛力、押せどもつけどもひるますさらす一心こつたる主の仇、かよわき力にふりほごき、つけ入りくゝゝごみ合ふれん力通すうらみの及、うけさり給へご名のりかけ、つかも折れよごつき通され、さすがの岩藤七轉八倒報ひは早き斷末魔、心地よくこそ見えにけり、もの音き、つけ女中方、なきなた手に手におつさりまく、さびしさつてまつた、遺趣は一人お上へ手むかひ致さぬご云へごもゆるさぬ席のこの前後をたてきる劍の林トカでのひなに群鳥のむせ

はせじご争ふごころに、奥用人大杉源造、静まれ、御詮意ありご聲にひかゆる女中方お初は臆せず、懐中より一通を取り出し、主人尾上心をこめしこの密書御披露ささし出す源藏取りあげ逐一によみおわり、ハイ、お初ごやら出かしたり、その場を去らす主の仇うちごめしは武士もおよげぬ大忠臣、殊更大切なるこの密書御上への忠節感するあまり、今より取り立て、中老役、その名もすぐに二代目の尾上、血潮にふれしその衣服、早新めて御前へ出仕、仰に御初は有難涙歩むもゆくも夢の夢、主は消ゆれご名は朽ぬ忠臣義女の道廣く館を離れ出で、ゆく。



中
紙子仕立兩面鑑

大文字屋の段

大文字屋の段

中
豊竹駒太夫
鶴澤重造
切
竹本津太夫
鶴澤友次郎

人形

大文字屋榮三郎 吉田玉次郎
娘おまつ 吉田文五郎
手代忠兵衛 吉田市松
下女おたま 吉田文之助
榮三郎母 吉田玉七
萬屋助右衛門 吉田小兵吉
手代傳九郎 吉田玉松
手代權八 吉田榮三

この淨瑠璃は明和五年十二月北堀江座に初演された菅專助の作で上中下三巻八段からなつてゐて、この大文字屋は中巻の切になつてゐます。此の段の内容をお知らせいたします。大阪上町での大店萬屋の悴助六は大文字屋からお松さいふ貞節な嫁を迎へたにも拘はらず新町の遊女揚巻と深く契を交はします、其處へ附込んで、お松に戀慕してゐる番頭傳九郎の陰謀によつて新清水の浮無瀬で親助右衛門から紙衣一枚で勘當され丹波路へ馳落する。お松は實家の大文字屋へ歸つて居

たが日夜夫の安否を氣遣つて居るが、お松の兄の榮三郎も律義者で妹に身を賣つて揚巻身請けの金子調達を勤めるので、お松も夫のため喜んで承知する。この一部始終を聞いた親の助右衛門は兩人の誠を感じ揚巻の身代金を出して其年季證文を持って大文字屋を訪れる。さいふ親の慈悲妻の貞節、義理人情に絡む絶品です。

(床本) 大文字屋の段(中)

高臺の御制の詞ゆきなく籠賑ふ浪花津や寄り來る人も大阪は實日本の臺所、諸色諸間屋立つく中に取りわけ本町筋、家柄古く身上は左前でもしも隠す河内木綿の長腰簾、萬屋の助六が女房の里ま格式も大文字屋榮

三郎、男一疋和らかな綿商賣の店先に汗水たらし仲仕共、咄しまじりにこてくそ、つくる江戸荷のしめ括り、片手に印書墨の眞黒になる七つ前、仕廻仕事ぞせはしなき、帳箱には手代の權八、番頭顔の鼻高く、煙管ひねくりまがり聲、ア、コリヤくく口やかましい世間咄し、置てもらふ、口も動けば手がやまる、仇口ばかり仰山でねつから仕事のはか行かぬはい、僅七駄の荷造りに二人三人が一日仕事、それではこんど、勘定にかゝるものぢやないよ、わめきちらせどいつもの事よ、耳にもかけず仲仕共、ヤコレ申權八様、またしてもせかくくそなんぼ其様にせかしやつてもな、手は二本はかないによつて、二人前は働けませ

ぬはいな、お前さんもまた日がな一日其様に内で修羅くらにやせずよ、ちつと神まるゐりか、また何處ぞの淨瑠璃でも聞きにいかしやれませぬかい、エ、それを貴様にならばふかい在の買まはしから諸國のかけ引おれが胸の算盤一つで一桁違ふても内は暗闇身上の狂言に追立てられて芝居所かい、よい仇口を叩かずに、仕事仕舞たらいんだくハイくくくイヤモ番頭様のきまりがよいので、お影でだんく荷のでる口が少なふなつたはい、ハイ、これでは出入方も胸の算盤の桁が違ふ、二進が三進も行にくい早ふ仕舞でまん直しに五一かゝの顔なま見よ仕事片付け掃出して、挨拶をこく立歸る、エ、頃の過ぎたならすめらこ、ぶつ、

く後ろの暖簾を上げ立出る榮三が母イヤノウ權八、さつきにから音むせぬが榮三はまた戻らずか言ふに權八、しかつめ顔ハイ朝めしの簀下に置くよ馳け出した旦那殿、大かた九郎右衛門町か島の内へ、見山屋でかなござりませぬぞい、イヤモ近年田舎の不景氣で掛損の仕つけ。モ氣もせやくば此番頭ばかり、其上諸式は皆高値極つた上にもきまられば仲々いけぬこちの身代じやにアノ旦那の、らくらには此白鼠もヤモほつこまつた、ごまの影口憎て口我はがほするつらにくさ、むつこはすれご色にも出さず、チ、權八のすけくさいかに心安いさて、主の影口はよふないもの、常に實体な榮三郎、何のそんな所へ行やらふぞ、噂を聞け

ば此間、清水でのやつさもつき、舞の助六殿は親御の勸當、この事よ、よく／＼の事で有ふがそれに付ては娘のお松、嗚や便りなからふも榮三もわしもこつ置つモ夜の目も合はぬもの案じ、大かた舞殿の訛言せふも萬屋の同行衆へ談合にかな、いたのて有ふぞいの、ハテそれはいらぬ氣もせてござりますはい、モ大事の娘御の舞様ちやが申しおかみ様の前ではちこ言憎い事じやけれど、此まあ廣い大阪に最一人さない大たわけ、ア、いとしほなげにアノ美しいお松様を七里けんばいけり飛し揚巻さいふアノマア古狐にだんまされけふもあげ、あすもあげさ毎日々々揚詰に豆腐のあげてもアノ様に買ふてはイヤモもんごたまるものじやござりま

せぬ、揚句のはてにはふんづまり、マ、有ふ事が有まい事か萬屋の若旦那さも、言はれる身でかたりをしたの、イヤ質金を遺ふたのさ、やばな事の有條それからおこつての久離沙汰それでもまだ仕たらいでさふん／＼揚巻を引揚て歩錢借りのま、稽古でコレマ高歩蹴さ出かけたはいナハ、い、イヤア、そりやマアほんの事かいの、イヤモほんの事かいの、所かいなハ、何が全盛の太夫の事なり、新町の親方から關破り願ふ故、代官所からも殿しいお手當ごふで追付青細引チ、こばく、チ、恐ろしやのホ、モ咄しするさへぞつとするさ尾緒を添しわんざん口、聞く妙三は氣遣ひさ老の習ひの目にもろき涙のしづくくる珠

敷の玉も敷添ふばかりなり、何ぞ肝が潰ませふがな、チ、其咎々々ヤ、お道理でござります、はい、私も聞いた時はモ腹が立て、餘り腹が立過ぎて悲しいやら又おかししいやらおかし悲しい悲しいおかししいおかし涙がばら／＼、ハ、い、チ、私さした事が餘り咄しに身が入てお前様までを泣きましたはいなアシタガシよふお聞きなされませやそんな大それた料人の助六殿故、親御の勸當はコリヤ尤じやと思はれます、それに付てお松様をアノ萬屋の内だべん／＼ご置たらごんな難儀をかいらふやら知れませぬぞ、高か嫌ふて置きざり同然にしられたお松様ハテモ男日照は有まいし、ちつとも早ふ呼戻して又ほかに相應なよい談合も有り

そふなもの、マ、よふ御思案なされませよ爲ごかしおのそしり口、舞のわらから焚付る、硫黄の鼻の先智恵は修羅を燃さす工みかや、さこそ妙三權八が詞のはしく何ぞやら合點行ずと手を打ふりチ、權八の何いやるぞいの、譬舞殿はごふ有ふこ一つ且嫁らしたれば萬屋の娘あちから戻されたら是非もなし、難儀がいやさに取戻す様な、さもししい心はないはいのハテモ舞殿がござらずば舅は親、助六殿のかばりに傍に居て孝行にするが嫁の道假令他人が聞かにかこそ人中でそんな事言出して大文字屋の恥ふれまふて下さるかご、恥しめられて佛頂煩テモ扱も堅いはくエ、マ年寄の片意地と鐵橋のいがんだのは、ごふでも焼かにかマ直らぬ

かいな、爲になる事いふがいやならごふなご御勝手になされませハレヤレ、く、しゆんだ咄しで氣がつまつたドリヤ臺所へいて暖燭でばい一引かけよふと禮儀をしらぬのはふず者、つぶやく勝手へ入りにけり、後には一人母妙三舞と娘の身の上を案じ重なる憂思ひ西の辻から聞しげに此家の主榮三郎心の屈托顔色に出さぬは百倍氣苦勞の胸を押へて立歸る母は見るよりチ、榮三戻りやつたか朝早ふ出て今頃まで何處に何してひもじかる、さいふを押へてアイエ、晝飯は得意先で呼れました、ヤそればそふご母者人、ごこへいても舞の噂、ア、ひよんな事に成ましたはい、さいのふ今も今さて權八が舞殿のしなす咄し、聞けば聞く程氣の

もめる事ばかり、マアごふしたらよからふご、そなたの戻りを待兼ました、チ、お道理でござります、シタガ申し母者人、爰をよふ御合點なされませ、助六は勘當なれば相手のない妹、助右衛門殿が戻したふても、サ何やかやの義理を思ひ遠慮の場合も有りそふなもの、そこを汲み取らぬはごつちの不粹、何んご、妹を取戻ふじやござりますまいか、ご律義な常の氣質さばそぐはね詞の先折て、ア、コレ榮三、そなた迄かそりや何事、マよふものを思ふても見や、たつた一人の子に別れ方ない舅御、殊に近頃はきつい弱り、せめて寢所の上げおろし介抱さすが一つ家のよしみ、アイヤ、そりや悪い御了簡、大金持の萬屋、一人息子が身

を打つ女郎、請出してもやりたいたいけれど、義理有る中から貰ふか嫁かせになつてそうもならず、所で助六を追い出したら嫁の方から逝るは定、そこで大夫を請出して、助六を呼戻す思案のそこ見た目は違はぬ、又助六は猶以てうるさがる妹、何も其様に親子さももみないものくふ様にして貰はいても、大事ないじやござりませぬか、ハテモ十人並には勝れたお松、取返して何處へなご、イヤコレ、榮三そなたはマアおかしい氣を廻す人じや、助右衛門殿に限りそんなむごい人じやない、フ、フ、フ、それはお前の正直一遍さいふものモ此様にもちや付出すぞ、常態にした仲でも、むごい氣の出るが世間の有様、ナ申し、ごふで有ふさお松

はこつちへア、榮三聞きさむない、まだいやるはいの、助六殿は勘當でもお松と夫婦の縁は切れぬ、女房の方から隙取さは、そりや大法に背いた事、それまでもない、二人三人男を持たして可愛い娘を疵者にはチ、此母が得すまいエ、マアほらしいといつけない母の腹立ぐはつたびし道具に當り中の間の襖押明け入にけり

(床本) 大文字屋の段(切)

既に日もくれ飯焚が燈す勝手手の八方に十方失ふ氣はくらやみ、心にもないわんざんを、いふも榮三が算盤の桁をはげれて門口の大戸おるせど落付かぬ胸の算用さつ置つ思案の中戸に人音して萬屋の手代忠兵衛、上り口に手をつかへお袋様榮三様へも助

右衛門申します、ちご御相談の事に追付けそれへ、マア嫁をさきへ遣はします、委細はお目にかゝつて申上げませふさいふ中門へ提灯のかげも心もかきくもるお松さいへご色かはな、顔は辛苦におも瘦せて、數居も高き兄の内、供のでつちや腰元も、氣の毒そふにしようけくご猫に追はれた忠兵衛は榮三が返事お松にも挨拶そこ、供の者、皆打連れて歸りける、妹はしほく兄の傍ものも得言はず裕に顔、榮三は奥口見廻してア、此間は定めていかい氣あつかひ、それでかきつう色も悪い、推量して下さんせ、世界に運の悪い者は私斗りのやうに思はれて手も力もござんせぬチ、そふ有ふく、何かの様子聞た故今夜は是非共おれむむかひに行

く所よふ戻つてたもつたのふ、何
 のよふ歸りましよ内にも寝ぬ殿御で
 も、大事にするむ女房の役さ、心一
 ぱい氣を付ても、氣に入ぬば私も誤
 りついにく小やさしう氣の落付た
 事もない夫婦中でも萬屋の内から葬
 禮しられいさか、様のおしへを守り
 辛抱したかいもない、夫の勤當其上
 に關破りのお尋者ご聞て今朝から湯
 水さへ、咽を通らぬ瘡の痛み、舅御
 は最前もア、よい時に勤當した、關
 破りをせふが首の座へ直らふが親へ
 難儀はかゝらぬ祝ひ事に酒一つ立
 派にはおつしやれど目には一ぱい涙
 を持わたしが、かんしてつぐ酒をお
 請けなされた盃もふるふてこぼれ
 る酒よりも膝をぬらすは舅と嫁の、
 涙は堪忍せぬものさ、むせ返りたる

くどき泣榮三も俱に目をこすり現在
 の兄が氣にさへ感じ入つたそなたの
 貞節、助右衛門殿の心根を推量した
 故も今も今こそ母者人に思ひもせぬ
 廻り根性所へかふ戻つて来たは、お
 れが存念の届いた印、コレわがみの
 其直な心を見すへておれが一つの無
 心が有かなんご聞てくれる氣か、チ
 マ改つた事おつしやります兄弟
 中に何の遠慮、モごんな事でも聞い
 てたもるか、アイ、そしたら新町へ
 いて、く勤をしても、エ、チ、
 悔りする筈じゃく、二張の弓はひ
 かぬさ女の道を立るそち、何と勤
 したられふぞ、がそこを破つて勤をす
 るが、やつぱり夫助六へ心中、つら
 い勤めするを心中さへ、さればい
 の、勤當しられてうるたへ廻るはし

よ事がないと諦めても濟せど、揚卷
 を連れて、退た助六關破りさへば科
 人どのやうな憂目にあはふやらサ其
 料を助ふご思へば、揚卷が身の代を
 親方へ立てさへすれば、御上体は願
 おるしてモ何のふしなう事は治る、
 さいふて其身の代がはした金で出来
 る事じやない、しりやる通り近年は
 不手廻しなこちの身上モ中々才覺及
 びもない事、いかぬからの思ひつき
 昨日揚卷が親方、扇屋に直談して義
 理合の内證萬端打明てモ近頃無理な
 事なれど一妹のお松をかばりに取て
 申しおるしてくだされさ、だんく
 さ、歎いたればア、了簡のよい親方
 よし揚卷が戻つてもふ疵のついた
 大夫、ほかに身受けの客も變改、廓
 の勤めはもさよりさゝれず、しかへ

に出しても虫付きと思ふやうに金にはならぬ、器量よしと聞及んだ萬屋の嫁御、ハテ得心づくで勤める氣なら、ヤコリや一番して見物じや、聞き分けたと、約束ばかりかためて置たかコレおかしい所をりきむ兄と思はむが、愛をよふ聞てたも、先の萬屋助右衛門殿はそなたやおれが實の伯父貴、其後繼に手代を引上げナア、アレ今の助右衛門殿、家の甥と念頃にぎちかはするこちの身代も肩を入れて今日まで世話して下さる深切さ其息子の助六が難儀を餘所に見て居たらア、血を分た從弟ならだまつても居まい表向は伯父の從弟のさいふでも血筋でない放れ際、どうよくな捨て置けとサ思ふやうな助右衛門殿でなければ共、世間の口より此榮三が胸

がどふも濟にくい、サ愛の所を辨へて、廓へいても勤てたも、きのふけふまで萬屋の花嫁御と、人に人を連た身が日傘をさしかけ、人中の道中、そなたの面目ないよりもおれが外い聞えふがいなさ、人に指ざし笑はれるもコレ義理と金とに恥を捨る心を思ひやつてたも、母の手まへを憚る涙、聲をも立す男泣お松も涙の顔ふり上げ、アイくくくくもふくくく、何にも申しませぬ、よふ勤めさしてくださんす、兄様嬉しう忝い、ア、是を思へば清水で夫の勤當ゆり次第、退ふさいふて揚巻殿證據にもらふたコレ此節、助六様も手を切る印守り袋の七枚起請、今さら義理の言い過し、取返されぬと合點して大阪放れ添ふ様に連てか

け落さしやんしても、世間もせまく千みのならぬ時には突詰た日頃の律義一筋に、もしひよんな心でも、出よかと思やわしや、身もよもあられぬ、嬉しや勤當教たらば心置ない女夫じやと楽しんだのも夢現さてもわたしは世の中の女の數にも入れぬ身が、夫の爲にする勤め、恥しいも、無念な共、口惜いとも思はぬが舅御や、かゝ様や、お前の心を思ひやり、それが悲しいくさ、くさき歎くぞいぢらしき、不便と思へど氣を取り直し母者人の手前は一寸遠れ世間へ顔が出されぬ、そなたは京の懇中へかけ落した分にせふ、サア早ふ新町へ連れていきたい、そんならわたしや書置を、ア、イヤもふそれには及ばぬ事、榮三出かした。

お松よふ新町へいてたもるのふ、母
 者人お前さつきにからの様子をチ、
 暖簾の内に立聞して泣いてばかり
 居たわいの、四百四病の病より貧ほ
 ご術ないものはない、貞女は兩夫に
 まみへずと、女大學傍に置いて朝夕お
 しへた母親が、夜毎に越路の客
 や、筑紫の人に添寝する、勤をよふ
 する出かしたと譽るは何の報ひぞと
 ぞぶと身を投げむせかへればア、コ
 レイナが、様々其やうにむつ
 かつて持病おこして下さんすなへ、
 わたしや何にもかもよふ合點して居
 るさかい一つも悲しい事はないナ、
 ない、ない、ない、ない、ない、後聲
 もしやくり泣き、道理御尤、道理じ
 や、御尤じや、御尤じや、御尤じや、
 ほんに浮世の義理あいほごサイン、

人を泣かすものはないわいのと三人
 顔を見合はして手に手を取り組み、
 泣く涙、落瀧津瀬に春雨の猶ふりか
 る如くなり、まだ暮過ぎと蠟燭の
 しまつに闇も苦にならぬ、きんか頭
 の助右衛門、くりり戸ぐばら、咳
 ばらひ、すつこ入り来る姿を見て、
 親子は泣顔押しぬぐひ、チ、お出な
 されませ、エ、まだお見舞も申しま
 せぬが、ア、たんさお心づかひ、な
 んの、一家中から譲りうけた萬屋
 の家督棒に振かける助六め、まくり
 出して仕廻ふたりやさつぱりさ夜が
 寢よいが、ア可愛いは此お松、悪性
 な男を引つかへ、男への心づかひ、
 大阪中の嫁さいふ嫁に煎じて呑し
 たい、器量さいひ、まだ廿にもなら
 ぬ者を、べん、と留て置は、大き

な殺生、今夜切りに縁切つて戻しま
 す、定めて不足も有るけれど、か
 り子を捨る様な不仕合せな助右衛門
 何事も了簡して下され、ヤ、ナニ嫁
 ア、いやもふ嫁ではないお松女郎、
 何でも用があるなら遠慮せず手紙
 でもばなれて居てもおれが氣は、や
 つぱりかはる事はないと、いふもほ
 ろりと涙聲、母親はすり寄つて、平
 生お世話に成てゐる榮三郎、不足と
 は勿体ないが、たつた一つ聞入ませ
 ぬは助右衛門様、助六殿は一人子の
 事、大金持のこな様、揚巻さやらを
 受け出して、ハテ妾めかけは有るな
 らひ、手元へ取寄せて置たらば、廊
 通ひも忽ち止み、マ止やうにやかま
 しい悪い愛名も立ぬ道理、ア、コ
 コレかみ様、エそれや大まか

なりな、了簡じやわいの、譲り請けた身代でも、盗み出してつかいおるはしよ事かなけれど、親の手から傾城受出す金出しては先助右衛門殿へ言譯がござらぬはいの、又あかの他人のおれを伯父く義理を立、けつこう捌くこなた衆へもみすく妾を傍に置いてコレ此顔が合はされませふかく其上のらめを勘當した後で吟味すれば備後の殿様から拜領した東倫の三幅對、箱ばかりで、中は明から、折わるふ殿様も近々にお登りお手馴の掛物久しぶりに見やうなご、御意も出まいものでもない、もしそふなつたらやくたいこくたいがこりや息子めをそのかした傳九郎めが所爲と思ひ、親受人へ吟味にやつたりや、傳九郎めは其夜から行方

が知れぬと言ふ隙やつて仕廻た奉公人、親受人もれだられず、難儀の元は皆息子め彌勘當の錠前をおるさればならぬ様になつたも此お松が不仕合はせおりにや諦めて涙も出ぬ、嘸、こなた衆の之後言いさし、顔を背けてたぐり咳榮三も涙吞込んで、ア、段々さお氣のもめる事ばかり、ア、いやく何事も思ひ流して勞の出ぬ様になされませ、申、オ妹は髓に受取ました、サア相手のない若い嫁を逝しもせず傍に置ばア、あの親父め合點がいかぬわいのと、近所なりに思はるもいやさに氣の毒ながら舅去り、ヤ書て来た去り状と、渡せば手に取泣入嫁、おしひらいてふしん顔兄様わたしは讀ぬがあじいな文章ドレムヤアこりや揚巻が年

季證文ア、マー、庵相いふまい、そりや去り状くじや、トハ又どふしてチいどふしてはそつちの胸に覺有ふ今朝からぶらぶらこちの内を見入れて門先をあちこちとするは道具會で近付になつた新町の扇屋、ハテ合點が行かぬと、隣の見世の片たかげへよび込で追かけくはして様子を問ば揚巻が代に妹を賣て助六が關やぶりの科を助けてやりたいと、涙を流して、榮三殿が段々の頼み故嫁御の器量を見に來たご、モ一ぶ始終を委しい咄、從弟さいふは名斗りで、根は他人の忤めを、マそれ程にまで思ふてくださる深切、何ご嫁が賣されふく揚巻が身請するにこそ血筋は引かれど姪ご名の付くお松が身受けモ千兩萬兩投げ出しても草葉

のかげの先助右衛門殿がよもや腹も
 立られまいと、買て取た其證文、モ
 眞實誓文こりや悴めが可愛じやない
 ぞや、こなた衆親子三人の志が、
 モあんまりく忝けさ、氣休めにこ
 氣休めにさあられぬ去り狀まんざら
 悪工みはせぬ助六め、追付け身の朗
 りも立ち、首尾よふ内へ戻つた時、
 又吹めて嫁入の式金は、其去り狀マ
 どれ程義理を知らぬ悴めでも此様子
 を聞たらば、心も折れて夫婦中、睦
 じうなり、そなもの、何こそふでは
 あるまいか、色も香もある。梅干
 親父辛ふ見へてもすいなりけり、親
 子三人手を合し、涙一時にわつこ
 泣聲耳に手を當てアレ又泣しやるは
 いのくくア、もふくくく
 此間ば流にほつと飽果た、どりや逝

ましよと門の口さつかは出るもゆつ
 くりと、泣に逝るさ哀れなり、母親
 は氣を付けて是はしたり、くからふ
 ソレ樂三提燈を、ハイちよつと送つ
 て参りましよと、手早に燈す小提燈
 追付行ば母親も、娘も少々落付いた
 胸をさすつて奥の間へ襖押明け入り
 にける、往來も暫しとだへしと四方
 に人音がすかなる、折を見合はす格
 子先妙法蓮華經申すも愚かや祖師日
 蓮大菩薩、龍の口にて太刀の下に直
 り賜ひ又或る時は佐渡島に流され
 賜ひ、難行苦行なされしも、彼一物
 をせしめんための御誓願なり、なむ
 妙りんはなけれごさへ渡る法華の題
 號相圖と見へ内よりくやりそつと明
 け傳九郎きたか、權八首尾ばまぶじ
 やく世話なしに娘は戻つた、助六

が来て居るさ一ばいくはして爰へ出
 そ、われも身振りを助六で物さへい
 はれば知れぬが暗り、くはへて退て
 腹存分樂しんだ胴からは約束の通り
 京へ寶其金は權八にアコリヤ大きな
 聲すなやい、そのまごころにぬかり
 はないわい、がいやな事は金七が、
 此中の晩から行衛が知れぬ、ひよつ
 と隆助か助六に捕らまへられたら大
 きなぼく、モウおれも大阪に体は置
 かれぬ、チーそりやうつかりとして
 居られぬが、マア何であらふと娘は
 おこそ、油断せぬやう駒寄のかけに
 隠れて待て居い、見付られなご手先
 で知らせ、内へそうく隔の襖差覗
 いて聲ひそめお松様くちよつと
 くこ小手招き何心なく出てくるを
 傍につれて小聲になり、コレコレナ

きてじやぞへくヤきてじやこは誰
がいの、サア今表から權八くそ呼
だは誰れと出て見たれば助六様じや
わいな、ヤアそれは、ハテ聲が高い
はいなくくくアアおいとし
ぼや身すばらしい紙子かけ、涙でつ
きてはくなれく畜生の様な揚卷め
おれが乾皮になつたを見捨、まいて
仕廻て後白波、モそれから獨ぼう
し、犬に追れて一夜さは稻荷の森で
寝たはいのふ、チ、悲しかるくマ
悲しなふて何とせふぞいの其眞實な
女房を嫌ふた罰でひだるいめ、アノ
急になんなりと喰してくれ、がマア
お松にちやつと逢たい、逢してたも
さおろく聲、アお馴染なり、ゆう
ふくに育つたお方がマ亂のやうな形
を見てあつい涙もくさいひつ、顔

に袖屏風唾の涙で取かくればお松は
誠と、そりやマアどこにエ早ふ逢た
い呼ましてアイヤくくまだ家
内が寢もせぬ中めしたきや、でつち
めに見付けられては爲にならぬ、コレ
駒寄のかけにかじんでじや、ちよつ
とあふて連ておはいり、わしや其間
に内の首尾灯もくらふして置きます
と、言様八方するくくおろして
さうがい庭の隅、隠せば傍薄暗り
お松が思ひ山鳥のおろの鏡の夫した
ふ、身はわなくくくいり戸を、漸
々明て軒の下助六様くどこにじや
いなアア、おいとしや現在女房の親
の内へ、よふ這入りもせず隠れか
んで、チマ此形は何事じやいな、
其憂苦勞を思ひやつて別れた時から
泣つかけ、ちつとば可愛と思ふてな

ら、マ私にする様にマアこちへと、
手に手を取ればあらくれし手さきに
悔り、ヤ誰じやチおれじやはいの
と抱付顔、ヤア傳九郎めアレエく
と言ふ聲に驚き馳け出る母親を、出
さじと權八綿の楯、お松を引立かけ
行傳九郎、戻りかいつた榮三郎、出
合がしらに傳九郎、逢たかつた道
ふさがれ、なむ三寶とお松を捨てひ
らりさぬき打ちかいくり拔身たく
つて山雀投しくじつたかご加勢の權
八、帯に取り付く妙三が氣轉はおり
たる八方の鎗にむすびめ親子して、
からだをじつと引あぐれば、宙にお
らくのふかなしや、こりや目がま
ふと七轉八倒、門には二人がもみあ
いれずあい内を氣づかふ榮三郎、す
き間に遁れにげ出す傳九郎、ヤア詮
議の有やつ遁さじと後をしたふて追
かくる。



辨慶上使の段

竹本相生太夫
鶴澤清一太郎
豊竹ばめ太夫
豊澤猿太郎
野本南太郎
野澤吉彌
豊竹古太郎
鶴澤清六

人形

郷の太君 桐竹紋太郎
侍従 桐竹門造
妻花の井 吉田扇太郎
女房おわさ 吉田文五郎
腰元しのぶ 吉田文三
武藏坊辨慶 吉田榮三
腰元 大ぜい

次 御所櫻堀川夜討

慶上使の段

元文二年一月竹本座に上場された文
耕堂、三好松洛の合作になり、全五
段ものでこの「辨慶上使」は第三段
目であります。作全体の内容は、梶
原景高、土佐坊昌俊の二人が源義
経の間罪使になつて上洛します、梶
原は義経を陥れて、己れの非を蔽は
んごの魂膽、土佐坊は是を知つて、
義経を庇護せんごの心、かくて二人
の入洛によつて、義経主従ごの二
人の間に様々の葛藤波瀾を起す次第
で、この辨慶上使の段の梗概は左の
通りです。

義経の室の郷の君は平時忠の娘

であるところから頼朝は若し義経
が平家と通じて居らぬなれば郷の
君の首打つて渡せこの難題を殿命
します、郷の君を預る侍従太郎の
館へ首切る役の上使は辨慶であり
ます。辨慶は主の爲には姫の首を
打て頼朝の疑念を晴らすが得策と
考へてきたが、郷の君の美しい御
氣色、殊に御懐胎の様子を見ては
それも忍びず當惑してゐるまき眼
に付たば腰元しのぶであつた。し
のぶはおわさの娘で郷の君に瓜二
つの容貌に打喜んだ、おわさの述
懐から、辨慶も、まだ書寫山の稚
児時代本陣の娘ご月待の夜假寝の
契を結んで懐妊した子供が信夫と
判つた。辨慶はお主の身代りに我
子を一思ひに刺し、始めて遭ふた

我手に致ない別れをするこいふ情
懐つきぬ好箇の名作です。

(床本) 辨慶上使の段 (中)

天下る雛にはあらぬ卿の君雲井を出
ていづかに義經公の北の方こなれ
て榮ある武家の妻、殊更に御懷胎御
腹帯の祝儀も相濟お上屋敷は公の事
しげく御心にさばる事もやこお乳人
侍従太郎も館にはしげし假居の先き
門前市をなしにける。腰元はした花
の井も卿の君をなぐさめんこはじき
石など采取や千草むすびの戯れ事、
紙寄の先に名をしるし互に引て結び
合、コレ見や角彌、そもじこ手越の
伊兵衛、おかし、龜井と鶴尾は長生
の水汲親父と信夫との、チ、いやら

し鶴尾殿次は誰じやと引開く、花の
井武藏と縁むすびはふしきと手を
たゝき一度にごつこチホ、い、い、打
笑ふ残りの二本は誰なるぞと開き見
れば神かけた義經様と御臺様お嬉し
様やごばかりにてそやし立たる姦し
さ、卿の君もおもはゆくコレ轉合言
やんな花の井の手前もあると口には
わざとすげなくて心の内の嬉しさは
ほにあらばる、御所櫻、雪に少しの
紅桔梗言はれごさすが大内の育ご
そは見へにけり。花の井は和らかに
イヤのふ皆の衆や、あなたは大事の
お身なれば聲高にものを言ふまい、
コレ静しく、ご制しごむる其處へ
爰に腰元、信夫が母おわさご言てお
もの縫い御機嫌の伺て會釋をこぼ
して入來ればそれを見るより花の井

はチ、おわさかよふこそ、あから
れし、けふはこゝなふおさもしそふ
なゆへ、誰をなのお伽にご思ひしに
チ、嬉しや、イザさて御前へす、
ませば卿の君は打笑みたまひチ、お
わさ此程は何とて見へざるぞ、定
めて四方の紅葉を見に、嚙面白き事
ばかり、うらやましやと宣へば、ハ
ア、御意の通り高尾梅の尾、嵐山、
わけて今年は稻荷山の薄紅葉がいつ
くよりも見事なと、世上の噂がそ
れもほんにく、針のみづで聞くば
かりあなたからは早ふこい、此方が
らばごふこいと参るも、紅葉見の
晴衣小袖の仕立もの、夜を晝に京田
舎が打交つてモそれば、賑やかな
秋でござりますげなむ、是と申すも
義經様も平家の大敵を打亡し此都に

ござなさる、故じやこ申すをきけば
 弓も引き方ごやらでモ嬉しいやらお
 目出度やら早速お悦びに上りませふ
 がけふよあすよご思ふ内、御姫様のお
 帯のお祝も濟だのに、なぜに早ふ
 〳〵お悦びには參らぬぞ、そアノ娘
 からしかつておこしました文をろく
 〳〵に見るや見ず、何も角も捨置
 取ものも取あへずお悦びに上りまし
 た、む又何ぞお土産が上りましたい
 存じますれど、けつこふな者はあな
 た方には有あまり、ほんの心斗りに
 て、せめて是をこ袂より帛紗包を取
 出し是ばかりばこ申して文字で書け

でに一度も不覺の産をせず腹覺のあ
 るさゝげもの、追付御産の月満て此
 海馬にひらり召九郎判官義經様
 若君は我なりご大手の門のさつこ開
 き安々と御誕生お目出たや〳〵チホ
 〳〵、チホ、〳〵、〳〵、ほんにつべこ
 べ〳〵ご長口上で息がばつむ、コレ
 〳〵娘お茶一つ汲でたも、ア、〳〵
 しんごやごしやべりける。卿の君も
 おかしさかくしテモ氣輕にわさ〳〵
 もの言やるおわさごばよふ付たご袖
 打さゝえたまひける。かゝる所へ奥
 使ひの女中立出て君よりのお使ごし
 て辨慶殿が見へましたご申上れば女
 中達サ、〳〵サ、〳〵、女嫌ひの武藏
 殿、ぬれかけていやむらせ、お慰み
 にはごふ有ふ、よかる〳〵ご立騒ぐ
 花の井制してイヤコレおわさ、そな

たアノ辨慶ご言ふ人見やつたかイエ
 〳〵ついに見た事ごござりませぬ、
 ナ、そんなら次の間へ居てお見受申
 しや、身の丈は七尺五寸、大きな体
 にいびぐりあたま、必ず笑ふまいぞ
 やご咄す中より侍従太郎一間を出て
 御前に向ひ、ハ、ア姫君には御安体
 今日武藏殿來たらる、はいかなる事
 かしられ共、義經公よりのお使ごあ
 れば、定めて御見舞の趣きならん、
 ア、イヤナニ腰元ごもけふばいづも
 ご違ひ、御上使の事なれば必ず庵相
 せまいぞご仰にハツト腰元ごもさし
 控ゆれば花の井も皆〳〵ごもに出向
 ひ衣紋正しく待居たる。

(床本) 辨慶上使の段 (切)

ごもに出向ふ程もあらせず入来るは

母が十九人、祖母はおこつて十三人
 母から私か手に傳へアノ信夫を産ま

堀川御所に隠れなき智仁勇の其骨が
ら、忠臣の鑑は唐土の豫讓我朝に
て其一人と呼ばれたる武藏坊辨慶へり
塗取て打かづき、大紋の袴ふみしだ
き、しづ／＼と打通りむづこ座して
一禮し、ホーッ存じたさは違てみづ
／＼とした御顔色、先安堵仕るご申
上れば卿の君チ、我君様にも御機嫌
能ましますかご、御詞有ば武藏坊、
ハア其御仰の健さ、是ご申も侍
從御夫婦の御介抱、御大切になさる
御苦勞のかいも見へ、祝着に存る
よ、是は／＼御挨拶、御主人ながら
御平産有までは、我館に預る卿の君
様、義經公の御前幾重にも御執成、
アイヤ／＼執成には及ばぬ、總て
物事の執成さいふばかなれ八合な事
を十分に言ひ執成、此辨慶それきら

い、見た通りを罷歸り、眞實に申な
ば、君にも嘸御満足、扱はは御夫婦
への咄しではない、後學の爲卿の君
様へ御物のたり、ア、惣して勇士の
戰場へ越く時は三忘を申して忘るゝ事
三つ有、まづ國を出る時家をわすれ
境を過る時、妻子を忘れ、敵陣に臨
んでは我身を忘るゝ、婦人の懐胎も
先其如く、既に月満、御産のひもを
解るゝは彼勇士の敵陣へかけ入て是
ぞ能敵ござなれ、遁すまじご引組で
首を取るか取らるゝか、よい子を産
むか得産ぬか、生るか死ぬるか、生
死の境が爰をよく御合點なされ、か
れてなき身ご思召さば、其期に臨ん
で不覺をさらぬ、ヤ拍子に乗つて馬
鹿な事を、ハ、ハ、ハ、肝心の御内
談遅なばる、爰は端近密に御意得た

し、しかし、あれに見馴ぬ女、わり
や何者だ。ハイ、私はわざと申て、
是なる腰元信夫の母、卿の君様をお
見舞に、参りし者でござりますぞ、
言ふに花の井引まつて、今あの者が
申す通り、我家の奥勤めも同じ事、
憚りなむらお心置なく御内談、ア、
イヤ／＼かれを始め女中方、間を隔
て遠慮召れ、サア君様、奥方、侍從
殿、奥へ参らふか、イヤお通り御案
内ご卿の君を誘ひて、侍從夫婦は先
に立、後に引添武藏坊、鎌倉殿の難
題を、つい打明けて言ひ得に、暫く
心奥の間に、打つれ伴ひ入りにける
年若けれ共剛愎もの、信夫差配しな
ふ皆様、何事の御内談お隙が入ふも
知まいに、お盃でも出してはの、チ
／＼それ／＼お煙草盆、お茶持て行ぞ

や夫はお慮外、次手にお菓子も頼ぞや、さらば此間にちよつさかゝ様、此頃はお顔も見ず、おなつかしやま立寄ば、チ、そなたも息災で嬉しい、明くれ傍に引すへて、見れどもあかね一人子を、手放して置親心、親なつかしと思ふより百千倍さばしらぬかや、たごへ御前の御意に入る共、必ず、朋輩衆をそでにすな、出かし立してそれまるゝな、林の中にも高い木は風が枝をば折ぞまよ、一人寢覺の度毎に、ためて置た數々もあへば嬉しうて口へ出ぬ、何をいふも身を大事に、コレ煩ふてばしたもんなさ、手を取かばす親ご子の、わりなき風情ぞ道理なり。や、有て侍従夫婦奥より出る屈託顔、おわさ目早く是は、二方様、ごふやらお

顔の色悪ふ、お氣の浮ぬ御容体、御内談ご申は何事でござります、ご言ふに花の井差寄て、さればいのふ、今日武藏殿参られしは、義經公には叛逆人時忠の娘卿の君を妻ご定め居るからば是同腹、一味でなくば姫君の首討て渡せと、鎌倉殿の御難題、おちいさい時から夫婦の者が手しほにか、育上げた姫君様、そもやお首を切れふか、何さやいばお當られふか、殊に只ならぬお身の上、辨慶殿も切兼て、ごつ、置つ思案の上、お身代りを立まいか、チ、夫ぞよろしき御分別、サ其かはりは誰彼せせんぎの上、年の頃みめかたち、相應した此信夫正眞の脊に腹ごやら、コレ了簡は有まいか、夫婦の者の苦しみを、思ひやつてご斗にて、かつば

ご伏て泣ければ、夫も座したる膝を吹め浮世の中の無心ごいふに、是に上越無心も有まい、其返報には夫婦の者を八ツ裂にもなされ、サちつごも惜まぬ、惜まぬ命は二つ有共一つもげふの役に立ぬ、ほいなさ無念さ悲しさを、推量有とばら、涙、始終の様子聞く信夫、涙を押へ傍により、十年に餘る宮仕へも、たつた一日御奉公申ても、お主様に違ひはない、其御難儀が何ぞ聞て居られふぞ不束な此身でも、お役にさへ立ならば、願ふてもないお身代り、サア御用に立て下さんせと、聞もあへず、走り寄、娘をしつか抱しめ、アコレつか、ごさの言やんなハイ、イヤ申、此子ばアノ私一人で出来た子ではござりませぬ、顔も

知らず名もしらぬ爺親が御座ります。其親を尋ね手渡しする迄はア、コリヤ、いかにうるたへたればさて母親斗りで出来る子が三千世界に有ふと思ふか、エ、其上顔もしらす名もしらぬ爺親を尋手渡しするまは、何をしるしに尋るぞ、偽り者、表裏者め、コリヤヤイ、子心にさへ主従の道を辨ふるに、見限り果たる女め、娘を連れて早歸れ、サ花の井こちへさ立上る、なふコレ待て下さりませ、偽り者と言はれば親故此子の道立す、顔もしらす、名もしらぬ、夫を尋るしるしは、是さ上の一重を押脱ば、右はかはらぬ詰袖に、左ばかりは振袖の、濃紅の染模様、橋ならぬ袖の香の昔床しく忍ばしく、娘が聞前恥かしき昔咄し、私元は播州姫路の近在福井村、本陣の何某こそ、私の父母、十八年以前、頃は夜も長月の、廿六夜の月待の夜、數多泊りの其中に

二八餘りの稚兒すかた、こつちに思へば其人もすれつもつれつ相生の松と松との若みどり、露の契りが縁のばし、チ、恥かしやついで、暗りの轉び寝につらや人の足音に戀人も驚きて、起行く袂ひかゆるを、振切急ぎ行く拍子、ちぎれて我手に残りしは此振袖、かり瘰の情は浅けれども、妹脊の縁や深かりけん、其月より身も重く、懐胎し、後にて何と詮方も、産落せしは此信夫、縁あればこそ子迄もふけしもの、此振袖をしるべにて、再び尋逢入る國を、く出て十七年、水子をかへさまんくささまよひめぐりしうき艱難、今に尋逢れ共女の念力、是こそ娘よ父よ名乗合するそれ迄は、身にもかへぬ大事の娘、お役にたぬば右の譯、卑怯未練でない申し譯、娘にばごふぞお隙を下さりませコレ信夫サ、立ちやく、エ、コレハシタリ立ちやいの、と言へざ立

・用愛家曲聲・

美音あめ

入罐きし美

¥ 1.00×0.50×0.30・

贈答おみやげ

お菓 子
お葉 子
おのり
お栗
おこし
お布
おき
お子

文樂座前・
文樂堂
電南六六九〇

兼見捨かれ、親子心の隔ての一重、始終聞
 入武藏坊、信夫が脊骨障子越ぐつこさいで
 一決り、うんさもだゆる苦しみに、こは
 くいかにこはいかにこ、傍で見る目の三
 人はあきれ果たるばかりなり、母は泣やら
 氣は狂亂、扱ば夫婦と言ひ合せ大事のく
 娘をむごたらしい、サア元の様にしてかへ
 しやこ、武藏にしつかさずがり付、泣より
 外の事ぞなき、真中に辨慶ごつかご座し、
 コリヤ聲びくにはさきおらふ、刻限來れば
 ぜひなくも、障子越の一決り、是には深き
 仔細有る事、まこぼへずこ是見よこ、押肌
 脱ばこはいかに、下着の衣の紅ひに、大振
 袖の伊達模様ヤア其振袖はチ、此片袖はそ
 つちに有答日外播州福井村にて人目を忍び
 暫しの假寝扱ば汝で有たよな、エ、そんな
 らお前が其時のアノ幼稚様かいな、チ、
 書寫山の鬼若丸だ、エ、すりや眞實の我子
 じやないかいのふ、チ、サ、始てつら見る

假寝の爺親、殺したばお主の身代りだは、
 ハアはつこばかりに母親はコレ娘あれ聞や
 つたかいのくそなたの爺御さいふはアノ
 辨慶様じやさいのふくサ、ちやつこ御對
 面申上やいのこ、抱き起せば起されて、母
 様、何やらおつしやるそふなが耳が聞へぬ
 もふ目が見へわわいの、私しや今爰で殺さ
 れて、お主様の身代りに立と思へば嬉しい
 が、親一人子一人の私に放れ、たよりない
 お前のお身が案じられ、そればかりが黄泉
 のさばり、イヤ申し御夫婦様、便りのない
 か、様、ごふぞお頼み申ます、又か、様も
 今からはお二人様を大切に、お身を大事に
 長生して、さ、様に廻り合、中よ暮して
 下さんせ、又折々は私も、不便と思ひ朝夕
 の御回向頼み上まする、そればかりさいふ
 聲も次第々々にせぐり來て、早玉の緒も切
 果て、此世の縁は切にけり、ハア悲しやこ
 氣も亂れ、母は死がいを抱き上げ、コレ信

は用御の話電お
 南
 5番・701番・711番
 (長)132番・5291番
 西630番



づまは 會宴御

のまसानみ
 理料泉温一南

橋 ツ 四

いのじ感・いる明

理料泉温一南

夫今一度ものをいふてたもいの、是がく
 一世の別れかいのふくいふて返らぬ事な
 から、香丈伸るにしたがいて只さう様に逢
 たいさ、したふも我子私も又どうぞ逢たい
 く尋ねさまよひ國々を廻りて今爰
 で逢ぬがましで有たもの、死る今はの際迄
 も誠の父さしらすして、母をかばひし心根
 がいぢらしいやら悲しいやら、此胸をさく
 様な、同じ殺す道ならば、互に父よ娘かこ
 名乗合した上ならば、此思ひはエマあるま
 いもの、浮世に心残るである、是ばかりに
 引かれて、三途の川と死出の山、迷ふてた
 もんな迷はぬやう道は一筋はるくぞや、
 法の光りやさし火のかけを力にさぼく
 ぞ、歩む姿を目のさきに、今見る様におも
 はれて、可愛はいのさばかりにて、空しき
 死骸を抱しめ、聲も惜まず泣居たる、辨慶
 涙押かくし、汝も咄し聞くさ等しく、扱は
 我子と飛立ばかり、生顔も見かりしが、ア

イヤくなま中に見つ見せては、未練な
 心も起らんかこ、腕に任せて抉りしもの、
 ひきたまりもこたへふか、我生れてより此
 年まで後にも先にもコレ御夫婦、たつた一
 度でござつた、ア、ほて轉合な事をして、
 生れし我子と聞よりも憎からふか、可愛か
 るまいか其様に泣を見て、太郎夫婦が居や
 らずばさ、泣より泣ぬくるしみは、コリヤ
 鳴蟬よりも中々に鳴ぬ盤の身を焦す、小唄
 も我身に知れたり、是に付ても親の恩、今
 取わけて思ひしる、唐土の樊噲が母の小袖
 を母衣と名づけ戰場まで持たりさいふ、そ
 れを覺ぶにあらねども、此下着は母の手づ
 からくたされしを、汝に片そでをさられた
 れども、なき母に添心地して縫も直さず、
 振袖の此儘四國九國、一の谷へも押寄々々
 危き難を遁れしも、是ぞ誠に親の影、年月
 重ね肌身放さず持し故、名もしらす顔もし
 らぬ親と子の印となつて十七年目に廻り合

角座

新陣容
大活躍の

新聲劇の素暗しらさ

西東松竹合併統一記念行

毎日晝夜二回開演

主君の絶体絶命の大事のお役に立る事、偏に亡母の賜はりし此小袖に手を通し、親子一所に引合せ賜ふとは、ハハハハ、廣大無邊の親の慈悲、チ、能死だ出かしたな、こは言ひつゝも息ある中、我こそ尋る爺御ぞ、こんな顔でも見せたらば、嘔噓しがらふもの、是ばかりが残念と諷で拂ふ包泣、侍従夫婦が貰ひ泣、四人が涙、八つの袖、八つの時計に打交せて、生れた時の産聲より外には泣かぬ辨慶が、三十餘年のため涙一度に亂すを果しなき。武藏心を取直し、なむ三寶早八つ時、サア太郎殿郷の君の御首討て渡されよ、チ、心得たりと信夫が死骸引よせて、あへなく首を討落し、返す刀を我弓手の小脇にぐつと突込みたり、人々にはと立臙をヤ騒ぐまい武藏殿、我切腹御合點だ參らぬか、郷の君の乳人とは、鎌倉殿もしろし召れたる、侍従太郎が此首を添て

渡さば天地を見ぬく梶原も、造り花さばよも言ふまい、サア武藏殿、さきうつるばや首討てたべ、チ、合點と抜はなし、ひらりと見へし刀の影、首は前にぞ落にける。立直つて大音上、ヤア門前にひかへし者ども隨に聞け、郷の君の御首侍従太郎二つの首を只今受取立歸ると、それさしらすは胸有て箱へひやくばかりなり、すぐに袂を押切く、二つの首を包に餘る目にもるゝ涙よ歎き果しなき、さらばくご首を左右にかき抱き立上れば、是なふしげし取付て我は未來の約束せん、我は親子の一世の限り俱に名残に今一度亡顔見せてたべなふと、泣ごしたへど、こがるれど、心強も振捨て見せぬもつらし見ぬもうし、かへらぬ道にあこがるゝ夫の別れ子の別れ、二つなげきを一すじに見捨て御所へぞ立歸る。

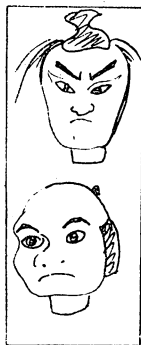
清六爽月に すむすむしい鮮烈な演技

道頓堀
浪花座

松竹家庭劇

東西南北松竹併一統念興行

・ 毎晝夜二回 ・



切 義士 銘々 傳

赤垣源藏出立の段

赤垣源藏出立の段

切 竹本大隅太夫

鶴澤道八

人 形

赤垣源藏	吉田玉松
下男惣平太	吉田玉市
女房おつぎ	桐竹紋十郎
母 眞 弓	吉田小兵吉
兄源左衛門	桐竹政龜

この淨瑠璃は慶應年間に倉田千兩が書下したと傳へられてゐます。赤穂浪士の一人赤垣源藏がいよく明日吉良邸へ討入さいふ宵に兄搦山伊左衛門の許へ今生の暇乞に往き、源藏の大酒を氣にかけてゐる母親が死を以て諫める涙のものがたりです。忠義にあつき赤穂浪士の裏にはこふした涙を絞る話も藏されます。

(末本) 赤垣源藏出立の段

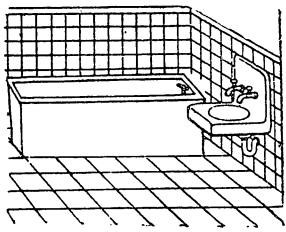
降り埋む雪の野山と人心餘所目にそれと白砂の、道踏み分くる千鳥足、醉に寒さも苦にならず、顔も赤垣源

藏が刀の下緒にぶらぶらと、括り付たる酒徳利、酒故に身も破れ笠、來かゝる兄の表口、詞ア、降るはくエ、降る雪を面白しとはひごつみの酒より後の心なりけり、其酔覺の水なられど、此降る雪の面白味。下戸は何と見るであろう。ヤコイツハ酒呑みでなきやわかるまいと。ひそり言してひよろく、すぐなしの字の道さへも。くの字に歩む玄關先。掃除仕舞て稽古場より、立出る若黨曾平太。門に人影何者ぞ。雪明にすかし見て。ヤ。源藏様ではござりませぬか。チ。曾平太か。ア、久しう逢ぬが達者なか。ヘイあなた様にも御機嫌よく、併お見受け申ますれば。御旅装が見すばらしい御有様。そしてマアエ、酒臭い。やつぱり御酒は

止ませぬか。イヤ申し源藏様 御舎兄伊左衛門様は、劍術御指南の御家柄。數多の御門弟が立替り入替り御繁昌でござります。それに引かへあなた様、御浪人故さは申しながら。見苦しいお姿で何所へお出でなされましたな。立ながら咄しも出来にくいアイこつちへい〜〜扱まアゴこへさは曾平太。聞いて呉れ。そちはお國へ御飛脚に往た留守中故。委しい事は知まいが。後の月の晦日に、あつちからも酒代こつちからも酒代の催促で、懸取めうが詰かけ、拂ふにも一文なしよ。詮方盡きておれが差料の小豆長光の刀を。こつそりさぶち賣て借金に拂ふた。聞えたらそれは悪いが無腰では居られぬ故思ひついたらはこの差替。マア見て呉れ、そりや拔ぞよ。曾平太危い後へ寄れ〜。へ〜。それびか〜〜く〜光らぬは。へ〜。コレ長光の替

りに。竹光の刀を差して居たを。いつの間にもやら兄貴が見つけて。ナイ源藏。武士たるもの、有うふ事か。重代の刀まで賣り拂ひ竹篋を差して居るさは沙汰の限。片時も内には置れぬ。サ出てうせふ。こ。吃相かへてや、腹立。南無三しくじつたさ遠のおれもぐつと閉口。ヤ爰は酒の止め所と分別はして見たが。ナニ。百迄も生る物じやなし。勘當されても吞ぬは損。其晩にこそ〜。友達達の所へ居候。さ出かけて見たが。マ何ぼうおれがやうな頓着なしでも。他人の内で喰潰して計は居られず。第一思ふ様に徳利の顔が見られぬ故。何でも角で是から一稼。思ふた所も何にも仕覺えた事はなし。やつぱり仕馴れた二本指よ。所が此頃友達世話で去る屋敷へ奉公に有りついた。所が其旦那も大酒呑。おれがこの呑助も氣に入て。近々お國へ連れて行く

化粧イノル
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水浄化装置
特許無臭便所



西區立賣堀北通一丁目
新橋
岡部商會
電話新町 二六六九
二二七六
阪急 夙川
岡部商會支店
電話西宮 一九七六

お供を云付けられ。遠國へ行かればならぬ。そこで母者や兄貴へ暇乞に來たのも鎗刀の腰も貰ひたいと思ふて。コレ見い。此通り手土産に一升さげて來たぞ。サ。取次し呉れ〜よ。イヤ此取次は出來ませぬ。ム。そりやなぞ〜。さればで御座ります。大病の母を捨て、家出せし不届物、見當り次第手討にするぞ。伊左衛門様御立腹の折柄。只今お逢ひなされたら。忽ち御手討殊に又。其様に酔てござつては仲々お聞入れは御座りますまい。今晚は先こつそりとお歸りなされませ。シタが申し源藏様。チトマア御酒をお止めなされませぬか。エ、馬鹿ぬかすなべらぼうめ。コリヤヤイ。此源藏はな。一年三百六十日元旦から大晦日迄酒に酔ぬ日は一日半日もないわい。ナニ。儂若蕪の身を以て猪口オな意見立。エ、すつこんでけつかるぞ。あたりへ響く高

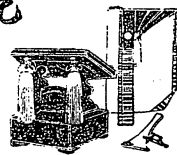
聲は。例の酒狂に聞取て。伊左衛門が妻のお繼。一間より立出で。詞コレハ〜源藏様。ようこそお戻り遊ばした。サアア奥へご兄嫁の常に變らぬ挨拶に。源藏も揉手してヤ。久々打絶ました。姉さまにも御機嫌よく珍重に存じます。シテ母人の御容態はいかゞでござりますなぞ。衣紋繕ひ威儀改め。打て變りし慰勸詞。お繼は猶も笑顔して。詞イヤモ御心配遊ばすな。此頃はお食事も召し上り。追々ご御全快で御座ります。ヤ夫は重疊。然らばちよつご御目通ひ致したい。御病架へ通りますぞ。行くを引留詞ア、申し。お待ち遊ばせ。見受けますれば此寒中にお襦袢も召さすお小袖一つ。其お姿では母様も又お案じ遊ばしませふ日外召しかえさせました。お綿入お羽織やお袴は。さう遊ばしました。エ、其節くだされた品々は。アノ夫はナニアノハ、

元阪本橋階海夫太儀
具道り昌淳州共 彦局 徳見

電話船場
一八六二番

助清中竹 彦島加

入へ西筋堂御目丁四町物唐區東市阪大

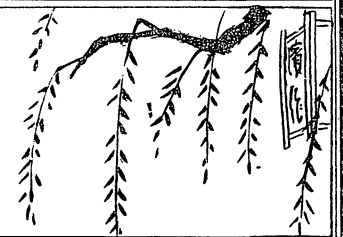


「い。エ、折角結構に着せてくださった綿入羽織よごしましては相濟ずま存じて、藏へ仕舞ふて置きました。ナニ。藏さばエイヤナニアノ藏はござらぬが。ム、そふだ腹の中へしつかり直して置きました。イヤ又上から着たよりも腹の中から温めた方が却つて暖ふござりますと。取つてもつかぬ戯言に。お繼もほつと興覺め顔かい立て一間より携へ出する綿入羽織。詞マアこれなりと召しませと折着せる。氣も和らかな羽二重ざわり。詞ヤは是く重々のお志ハ、アエ、有難うござります。へ、是をやれば又二三升、エ、何と仰言る、ヤ何アノ三升く。ム、夫々母のお側へ參上と申したのでござりますと。何を言ふやらしじもなく。お繼が案内に源藏は。徳利引きげ一間なる。母の病架へ曾平太は。我部屋へこそ入にけり。お繼はこなたに手をつかへ

詞申し母様、源藏様がお歸りでござります。取次ぐ聲に母眞弓。屏風押し開け起直り。詞ム、源藏が變る事もないか。今日來やつたは定めて兄への訛言で有ふかの。そふかくと會釋する慈愛の詞に源藏は舌も廻らぬ銘詞を隠す心の切口上。詞ヤ是はく母人様、存じたよりは先御機嫌の態にて恐悦至極に存じ奉るぢやハ、ハ、ハ、ハ、エ、扱と私事もいつわいつ迄狼狽では居られぬと存じて此度朋友の推舉によつて主取を致しましたお悦び下されいと。言出す詞の先折て。ア、コレく誠らしい持へ事今迄の手ではモウ行かぬ。ホ、ハ、ハ、ハ、ハ、其嘘は喰ばぬわいの。イエくく、決して嘘ではござりませぬ。しかも近日殿様の御供でお國へ出立。いつ歸國とも相知ず。随分御安泰に、あらつしやつて下さりませそりやはや人の子として親兄への孝行の道は

即席御料理
電新町九番

新町 作瀧



辨へてはおりますれど。酒に性根を奪はれ
 何彼ぞ御心勞をかける計り。兄伊左衛門殿
 別しては。お繼殿の親切骨身に耐えていつ
 かな忘れば仕らぬ。ア、イヤ忘れぬは酒
 ぢや。ハ、ハ、ハ、ハ。したか最早、母人の
 御前で呑み納めに持参仕つたサこの徳利。
 是今生のお暇乞。ハ、ハ、ハ、ハ、イヤナニ旅立
 のお暇乞に参つたのでござりますわい。ム
 しかこそその詞に違はないか。イヤモ用矢
 八幡かけて何の偽を申しませうぞ。聞く
 より母は這ひ寄つて佛間を開き詞コリヤ源
 藏。アノ上壇の御位牌冷光院殿吹毛玄利大
 居士此御法名。よもや忘れはせまいかの。
 今更改めて言ふには及ばれど其方は。十二
 歳の時御縁あつて赤穂の殿様へ御奉公。幼
 少より二親の手を離れソレ其様に成長して
 身に餘る御知行を下され譜代恩顧の歴々の
 衆さ肩を並べしは、サ誰が陸なるぞや。ア

、恐れ乍ら淺野内匠守さま。思ひも寄らぬ
 去年の騒動。吉良上野が爲にやみくも御
 切腹。一家中は浪人して散りくばらく
 去ながら御家老始め忠義の義士。御鬱憤を
 晴し奉る企は有そな物さ。そちが歸
 るを明暮待ち兼しに。戻た日から酒の所
 望。酔ぬ日もなく打て變りし其身持。コハ
 心得ずと思ひしが。イヤ、所存あつて
 の。酒狂か。意見もせず捨置しは親の怒
 目。日増に暮る放埒惰弱御先祖傳來の刀ま
 で賣拂ひ剃へ大病の母を捨て家出せし不
 孝物めが。またその上に侍にあるま
 じき。二君に仕へて手柄顔。見下げ果た人
 外め。にらむ眼にはらくらく口惜し涙い
 さ。猶。痰火に胸にせきのばせ。お繼も
 何ぞ取りなさん。詞も涙先立て。脊撫てお
 るす許なり。源藏は空吹く風。詞ア、コレ
 母人一應は御尤ちや昔聖氣の偏屈さ申

つねに新鮮な
 松竹座

所謂松竹座風
 なる現代空氣の
 尖端を往くその
 清新にお親しみ
 くださいまし。

映畫と
 レヴュー

物。よう考てござろうじませ。よし又敵討つ所存の者が有てからば、高の知れた僅な素浪人。吉良は高家衆の出頭。殊に上杉さいふ大名の尻押が有て。中々近寄る事も叶ばぬ。是が蟻螂が斧こやら。及ばぬ事ぢや。そんな古風な忠義立せうより心よう酒でも呑んで身を養ひ。長生をした方がマア當世でござります。切て放した詞のさがり矢、的の外れし分別なり。母は怒の聲ふるはし。詞エー儂計はその様なむさい心ばあるまいと、見違ふたが口惜しい。親子の縁もこれ限り。きりく立てうせおろうと、烈しき詞もろ共に。はた立て切る隔の襖。源藏は大欠伸。ア、ヤレ。折角按配よう廻た酒。母者の長談義で醒て終ふた忌々しい。チ有る。幸持て来た此酒。ドリヤ一杯氣を付ふかご。傍なる徳利引寄て。口から口へがぶく

。諸ア甘露く。強者の交り頼みある中の酒宴かな。ハ、ハ、ハ、ハ、詞イヤ又此味計りはマたまらぬわいと。又引かえ吞盡し徳利枕に足踏延し。寝るより早く高軒前後も知ぬ有様に。お繼も呆れて詞なし。折から一間に聲あつて。詞ヤア不忠不孝の赤垣源藏。兄お成敗観念せよと。手槍引提げ伊左衛門。襖蹴開き無二無三。突てか、ればむつくこ起き。抜けつ潜りつ飛鳥の如く繰り出す槍先引ばづし。徳利でしつかご押へ付け。詞ハ、ハ、ハ、ハ。徳利酒の肴にはお定りの按梅よし。田樂さしか芋さしか。イヤモこの御馳走はたべたも同然ぢや。こんな所に長居は恐れ。ドリヤお暇申さうかご。槍巻落し立上る。詞ヤレ待て源藏用ひ有さ刀を杖によるほひ出で。詞重々の不届母む手討覺悟せよと。刀をすらりご抜ばなす。コハ危やと止る嫁。振り放し振り放し源藏

松竹キネマの封切映畫

朝日座

みなさまの

つれに清鮮
つれに優秀
つれに満員

目わけ寄るぞ見えしむ。我ぞ我咽にむば
 ぞ突立てたり。なふ何故の御自害ぞお繼は
 驚き兄弟も。おろく立寄り介抱す。母は
 苦しき息を繼ぎ。是には深い仔細あり。コ
 リヤ源藏今日そちが來たは敵討の門出。親
 子一世の暇乞でサ有ふむな。アイヤそれは
 イイヤ隠すまい隠すまい。大望に加擔せし
 身を以て。暇乞に來る様な狼狽な根性では
 まさかの時此の母に心引れ。未練な働あ
 らんかこ。愛情を斷つ我自害。老さらばう
 て惜からぬ。此身を捨て其方に。手柄お
 させた計ぞや。伊左衛門涙を拂ひ。詞す
 べて大望を企るに。一味の者醫いかなる
 事に及ぶこも。口外は致すまじき。誓紙血
 判を取て根を堅くせずんば。成就は相成ま
 い、さるに依つて其方。大酒に根性を奪は
 れた体に見せかけ、餘所乍らの暇乞はすれ
 共、子を見る事親にしかずこ、母人の御明

察、よもや違はいたすまい拙者ぞてもたつ
 た今、汝も手練を見てよく知つたり、サ此
 上げ誠を明かし我々に安堵させよ源藏ぞ、
 星をさいたる兄の詞、源藏はつこ飛びしき
 り、詞ハア、恐れ入つたる御賢察、今は何
 をか包まん、大石内藏之助殿を始め一味の
 義士四十七人怨敵上野を討取らんぞれうへ
 共、敵は用心堅固にして、討入るべき術な
 く、無念の月日を送りし所、時來つて今月
 今日、吉良上野雪の茶の湯を催し、又夜に
 入ては年忘れの參會ぞて數多の來客、用心
 油斷は今この時ぞ、大高源吾體に聞き出し
 今宵夜半の鐘を合圖に、兩國橋にて勢揃へ
 を致し、直に敵の館へ夜討の手筈、首尾よ
 く本望ぞげし上、御菩提所泉岳寺へ引取、
 上野の首をお墓所へ手向け奉りその場を
 去らず皆切腹の契約、忠孝二つなむら全き
 事能はずこば古人の金言、親妻子にも洩す

東西南北併統一記念興行

東大歌舞伎

・幕開時三日毎・

絢爛たる歌舞伎の殿堂
 中座
 ・道頓堀・

まじき誓紙の表を守り、わざと酒に身を持
ち崩し深くも包み隠せし故、ハ、勿体なき
母の御自害、冥加至極の御教訓、忠義にか
へし不孝の段、御免なされて下されよと、
勇氣たゆまぬ武士も、取亂したる男泣、お
繼はいさげせき上、この四五日は朝夕の
お食も進むやうになり、悦で居た甲斐もな
ふ思ひもほげぬ此御最後、武士のお家てな
いならば、斯した事もエ、有まいに、返ら
ぬ線言口説立、くどき立れば人々も、こら
へ兼たる恩愛の涙に濡す袖秋紋り兼たる計
りなり、様子を聞たる若黨曾平太。一間の
内より踊り出て詞ヤ淺野の所織ぞ知つた
る故間者に入込某こそ、吉良の家臣尾林
平太、聞き取たる一々を上野様へ注進さ、
逸足出して駆け出す有合ふ手槍、源藏が
手練の一突平太も最期、虚空を掴んで死で
んけり伊左衛門につこ、笑ひ、詞、門出
の血祭幸先よし。この手槍こそ先祖赤垣將
監殿數多の戰場にて數多の敵を突伏、高名

ありし覺への業物、敵討の錢別なるぞ、ア
レ、今打つ時計は亥の上刻、出立の用意
くハア然らば御免さ立あがり納戸の疊引
上て取出したる菰包切ほごげば、太刀物の
具、いつの間にかは陣太刀に作りかへたる
小豆長光、小具足取てさつご着なし、重筋
鐵の兜頭巾、山道染たる袖印の忍び装束小
手脚當身輕に出で立つ形相は目ざましくも
また潔よし、詞ア、嬉しや本望や勇ましい
俵の有様未來にまします殿様や夫將監殿
へ敵討の次第を申上るむよい土産さらばさ
らば計につこり、笑顔を娑婆の名残にてあ
へなく息は絶にけり、ハアと泣く嫁兄弟も
俱に消入る氣を張詰め、源藏はつこ立上り
唐土の王陵が母にも優る御惠、御教訓を
頭に戴き本意を遂げんは今宵の中、直ぐ切
腹仕り、後より追付奉らん、はやおさ
らばさ立は弓、血筋の別れ今更に弱る心を
取直し、手槍引提げ源藏は忠義の道を一筋
に雪を蹴立て馳り行く。

評好大てしと畫映のまさなみ
るみて賜を

切封の畫映ネキ帝

・帝キネ直營・
辨
天
座

四ツ橋
りよ

五月の文樂座
消息日誌

△五月一日

五月本格興行の初日開場。

△五月三日

西野田職工學校内にある職校會の觀賞會
があり二百餘名の方々の總見をされまし
た。

△五月四日

桐竹紋十郎眞負の阿部師團長は紋十郎後
援會の一員として御來觀されました。

△五月七日

上海兩江籃球隊の一行も領隊陸禮華女史

他十一名で見物しました。同一行は中華
に誇る陸上競技の花形連です。

△五月八日

BKの恒例による舞臺中繼放送で菅原の
『寺子屋』を津太夫、友次郎で全國へ放
送しました。人形は榮三の松王、文五郎
の千代、源藏は玉次郎、戸浪は政龜です

△五月九日

天満開局藥劑師會の方々が三十餘人お揃
ひで『文樂座の御宴會』で一日の趣味の
觀賞會を催されました。

△五月十四日

長野縣諏訪第二高等女學校の女生七十六
名が修業旅行の途次石川稅教諭に伴げれ
て來觀されました。廿四孝の狐火で名高

現代的



電話戒三七五六番

い諏訪地方の士女だけに一層淨瑠璃には趣味深く古靉太夫の道明寺菅相取名残りの段を聴いて時間の都合上歸館されました。

△五月十六日

桃山病院に於て組織されてゐる健交會の方々が『文樂座の御宴會』で御觀覽されました。

△五月二十日

武藤千世子夫人主宰の婦人同志俱樂部の御一行が第七回總會を兼ねて和やかな親睦會を催されました。

△五月二十三日

大阪學生映畫聯盟主催で『文樂鑑賞會』を開催、若人と文樂の接近の有意義な集

まりでありました。

△五月二十四日

第二次學生映畫聯盟文樂鑑賞會を開催、多數の參會者で盛況を呈しました。

△五月二十四日

華絢なる五月興行も盛況裡に本日終演しました。御後援下さいました方々へ御禮申上ます。

五月二十二日より二十四日迄の三日間中央公會堂における大阪府市青年團、處女會聯合主催の『民謡舞踊郷土藝術大會』へ特別出演をいたしました。

狂言は義經千本櫻の道行初音の旅路で人形は靜を扇太郎、忠信を玉松が遣つて喝采を博しました。

茶



大改及池橋

茶館

番三三二町新話池

文樂座使用料 (一日)

時間 場所	收容人員	晝(自正午 至午後五時)		夜(自午後六時 至同十一時)	晝(自正午 至午後十時)
		平日	80圓	100圓	160圓
文樂座	約 850人	土曜	80圓	110圓	170圓
		日曜 祭	90圓	110圓	180圓

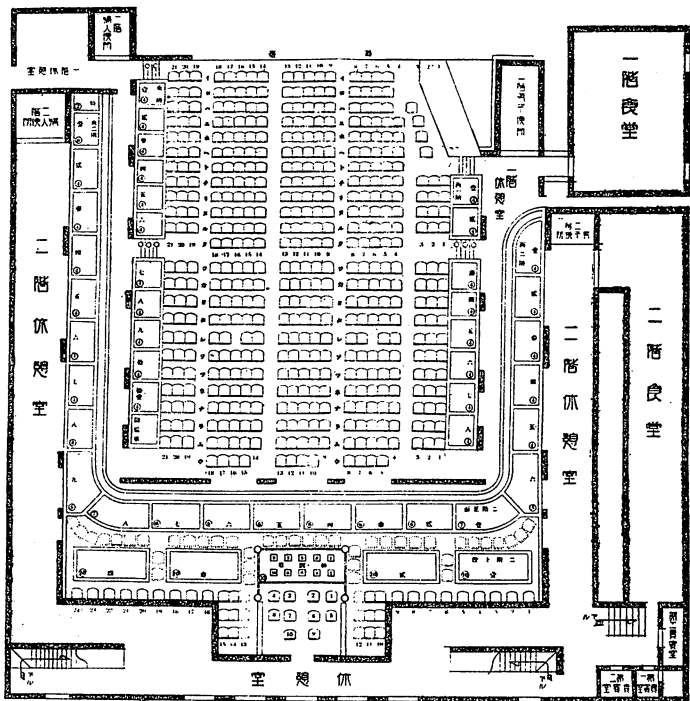
◆上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◆割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

器具御使用料

器 具 備 考	數量	料金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回 15圓
同	同 普通燈ノミナラザルトキ	1回 20圓
所作舞臺	晝 夜	1回 10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回 50圓
同	晝夜通シ	1回 70圓
アプライトピアノ	晝 夜	1回 20圓
音樂譜面臺	晝 夜	1臺 10錢
アークスポット	晝夜4・5 KW	1臺 10圓
スポット	同 大(1000W) 小(500W)	1臺 5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺 5圓
シーリングスポット	100W 500W	1臺 3圓
サスペンションライト	100W 500W	1臺 2圓
フットライト	20W 100W 7球	1本 1圓
セラチンペーパー		1枚1回 1圓
大 衝 立	晝 夜	1對 5圓
演 壇 設 備	同	1回 2圓
其 他	必要ニ應ジ實費	
受付2名、案内10名、 電話係2名、下足2名	1日1人 1圓宛	16圓
冷風裝置使用料		無料
暖風ラゲエータ使用料		無料

文樂座御席場案内



御観覧料の外一切御不要の上、大部分椅子席になって居りますから、お一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前賣切符壹等お座席・壹等椅子席のお切符は五日前から發賣致します。また五日以後のお切符も右席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にされます御用命の節お呼出しの電話は

南四七一一番で御座ぬます切符賣場右指定席切符は當日前賣さし、正面西側本家入口にて發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

尙多人數様お團體様のお申込も御相談いたします。

内案御堂食座樂文



洋食堂
(西館階上)

スピード・ディナー (御定食)	ス	フ	コ	ビ	チ	カ	チ	コ	コ	マ	ア	ソ	文
ライ(海老、魚)	ム	ロ	フ	フ	キン	レ	キン	ール	ール	カ	ス	ン	楽
時													
四													
五													
〇													
〇													

和食堂
(西館階下)



吸付辨當	親	親	親	親	親	親	親	親	親	親	親	親	親
食事(五品御飯香物)	食	食	食	食	食	食	食	食	食	食	食	食	食
二													
一													
〇													
〇													

酒場
(西館階上)



洋酒
お茶

文楽カクテル	マンハツタンカクテル	ドライマテニイ	アブサンフラツペ	ミリオンダラー	ミリオンダラー	ウイスキー	ウイスキー	ウイスキー	ウイスキー	ウイスキー	ウイスキー	ウイスキー	ウイスキー
一													
六													
六													
七													
〇													
〇													

南一温泉料理
營

文樂座

使用規定

- 一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ
- 二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守リ下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ問ハズ御使用前テモ御使用中テモ御使用ヲ取消シ致シマス
- 三、當座御使用料金ハ別表ノ通りデアリマス長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス
- 四、御使用料金ハ當座が御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセヌ
- 但シ不可抗力ニヨリ當座が御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス
- 御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出テラレシ時ハ半額御返却申シマス
- 五、御使用方法ニヨリ當座が必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用テ必ず其ノ設備ヲシテ戴キマス之ノ設備ヲ怠ラレシ時ハ御使用ヲ取消シマス
- 六、御使用者ノ御希望テ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用テ特別ノ設備モ出來マス
- 七、五、六項共ニ御使用済ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ費用ハ御使用者カラ申受ケマス
- 八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ滅失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス
- 九、御使用者ハ當座従業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセン
- 十、當座従業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス
- 既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任セマセヌ
- 十一、臺本檢閱並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

◇ 文樂座御ひるき名簿募集 ◇

- 一、申込は必ず官製はがきの事。
- 一、葉書には両面ともに御住所御芳名を御明記下さい
(御住所御芳名の他一切不要)
- 一、御ひるき名簿作製の上御芳名に随つて種々の計劃の御通報を申上げ、且つ御優待方法を講じます。
- 一、會費其他一切申受けません。
- 一、宛名は大阪市南區四ツ橋 文樂座編輯部宛の事。

文樂座の歴史が全部
わかる唯一の文獻

楽しいグラフと興味
ある好贈物月刊雜誌

「文樂今昔譚」 特價 金貳圓

道 頓 堀 一部 金三十錢

御休憩は

バルコニー
露臺

遊歩場を御利用下さい。

食堂二階より御自由にお昇り下さいまし。

蒸しタオルを御使用下さい。

一階西側の大休憩所に御座います
どなた様でも御自由におつかい下さい。高雅な香りの資生堂ローションを使用してゐます。

その色合。その雅趣。

郷土藝術の香ひ溢るゝ

文樂木版手摺繪葉書が

新版發行されました。

春陽會に於て文樂繪に就て定評ある

齋藤清三郎氏の作品です

毎月發行 三枚一組美麗なる包裝

一部 金五十錢

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間が混み合いますから一幕前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雑誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。(クラブ化粧室。)

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處で願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

御携帯品は

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。御歸りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのこきは御携帯願ひます。

お場席

各自に御持ち下さい、切符に一枚づつ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします。御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

案内人へ

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所でお自由にお飲み下さい。

幕間中は

寫真撮影は絶對にお断りいたします。病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

場内にて

寫真撮影は絶對にお断りいたします。

出演者

寫真撮影は絶對にお断りいたします。病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の間

場内にて御使用の間は、御休憩の間は、御座席にお立ちのこきは御携帯願ひます。各自に御持ち下さい、切符に一枚づつ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします。御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

四ツ橋

文

樂

座

前賣切符専用電話南四七二番

電話南 三七八八番

昭和六年 五月二十日印刷
昭和六年五月三十一日發行

大阪・四ツ橋・文樂座
券種 大人 大 塚 頁 三

大阪市西區土佐堀通一丁目
印刷者 永井太三郎

大阪市西區土佐堀通一丁目
印刷所 永井日英堂印刷所

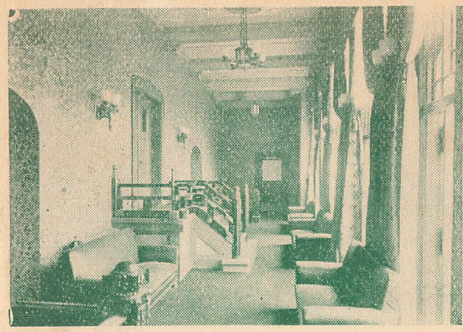
御集會には

大阪の宴會劇場

絶大の好評を賜つてゐる

「文樂座の御宴會」を

御利用下さい



(B) 金四

園 (御一人様)

一等椅子席で御觀覽をねがひ
お食事は新鮮な「ランチ」
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ
筋書床本入り番付つき

(A) 金五

園 (御一人様)

一等椅子席で御觀覽をねがひ
お食事は皆様本位の御定食
(和食洋食兩様の設備が御座あります)
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ
筋書床本入り番付つき

- お申込は二十名様以上をお請け致します。
- 記念撮影のお寫眞は終演と同時に持歸り出来るやういたして致します。
- お申込はお席席其他の準備の都合上五日前にお願いたします。
- お申込は四ツ橋文樂座事務室へ願ひします。
- お電話の御用は前賣専用南四七一・一三七八八・七四〇八番へ

家庭一品

ク
ラ
ブ
ク
ラ
ブ
煉
歯
磨



大正價廿錢
中正價十錢